

二次元ドリームノベルズ

守護聖女 オウイトブレス

Guardian Saint White Breath



でいふいと

挿絵 ● アイアンカー

18
未 満

Characters

登場人物紹介



守護聖女 ホワイトブレス

聖気を力に戦う正義の変身ヒロイン。
母となった今は、娘のホワイトハートと共に
悪の組織『ディストピア』と戦っている。

ホワイトブレスの娘。
母と共に『ディストピア』と戦う
聖なる変身ヒロイン。

ホワイトブレスの娘。

母と共に『ディストピア』と戦う

聖なる変身ヒロイン。

『ディストピア』の残虐非道な蜘蛛怪人。

第一章

正義の母娘ヒロインへと迫る悪の糸

004

第二章

恥辱と屈辱の怪人出産

058

第三章

仮初の日常。

敗北ヒロインを襲う淫らな欲望

071

第四章

再戦。守護ヒロイン運命の日

085

第五章

白き正義、完全屈服。

別れ告げる肉穴ヒロイン



第一章 正義の母娘ヒロインへと迫る悪の糸

「これで終わりですっ!! 正義の力を受けなさいっ!!」

幼く愛らしい声を高らかに響かせ、黒く巨大な存在へと光り輝く拳を叩きつける少女。

神々しさすら感じる白きレオタードと桃色のスカートの身を包む正義の変身ヒロイン。
守護聖女ホワイトブレス。

彼女の活躍によって悪の組織『デイストピア』は壊滅し、世界に平和が訪れた。

※

日曜日の商店街は、休日ということもあり多くの人々で賑わっていた。家族連れも多く、両親に甘える子供達の笑顔が太陽のように眩しい。

「心、今日は何を食べたい？」

手を繋ぐ母娘。ライトブラウンの髪を長く伸ばした、おっとりとした顔立ちの母親――

白守早苗は娘の心へと聞いた。

白いブラウスに灰色のタイトスカートが落ち着いた印象を見せる、三十二歳の人妻。

娘を産んだ、女としての魅力が膨らんだ彼女。白いブラウスとブラジャーで押さええてい

るものの、大きく膨らんだ胸の部分はその爆乳を周囲に伝えるに十分で、男達の日を惹く存在感だ。

「えっとねえ、ハンバーグがいいなあ」

母親の問いかけに笑顔で返す、早苗と同じ色の髪をポニーテールにした心。初等部ながらに歳不相応に膨らんだ巨乳が、プリントされた動物を歪めるようにTシャツを押し上げている。

可愛らしいフリルの多いスカートは早苗の趣味だろうか。活発な印象を持たせる少女が激しく動けば、隠された可愛らしい下着が見えてしまいそうだ。

「それじゃハンバーグにしましょうか。夜にはお父さんにも電話しようね」

「うんっ!!」

幸せな笑みを浮かべる白守の母娘。家族の幸せな光景の中に足りない夫という存在。しかし二人だけでも、彼女達は幸せそうだ。

単身赴任で家を離れて中々会うことはできないが、電話で声は聞こえるし、長い休みの時には帰ってきてくれる。

まだ幼い心が、会えない夫を嫌いにならないかという心配はあったが、どうやらそれも問題ないようだった。

最愛の娘を喜ばせる為にも、今日は腕によりをかけなくてはと思いながらも、買い物を始めようとした矢先。遠くの方から響く多くの悲鳴が、白守母娘の耳に届いた。

「まさか……心っ」

「大丈夫だよお母さん！ わかってる!!」

ざわめく人々の中で、早苗と心は人目につかない物陰へと姿を隠す。逃げるわけでもなく、強い闘志を瞳に宿した二人の身体は、光に包まれた。

※

「さあ人間共は纏^{まと}めて磔^{はりつけ}にしてやろう!!」

蜘蛛^{くも}の姿をした怪人の手で街の一部に糸が張り巡らされている。

多くの人々は逃げていたが、それでも遅れた者達が囚われてしまっていた。響く人々の悲鳴。絶望がその場を支配したと思えた、その時。

「そこまでですっ!!」

高らかに響く女性の声。それが何を意味するものかを、その場にいる全員が理解し、声がした方向である空へと視線が集中する。

「平和に暮らす人々を脅かす悪行は、私達がいる限り許しはしません!! 悪を浄化する白き息吹、守護聖女ホワイトブレス。参上っ!!」

悪の怪人を倒す為に天から地に降り立ったのは、輝くような銀色の髪を靡^{なび}かせる美しいヒロイン。

白を基調とした編み上げのレオタードに丈の短い桃色のスカート。同じように編み上げのロンググローブとロングブーツ。胸元にはハート型の宝石が煌めいている。

凜とした口上を放ち怒りを含む表情も、本来のおっとりとした優しさを完全に隠すことはできない。

(……うう、毎回のことだけど……恥ずかしいわ……)

怪人の前に凜々しい口上と共に現れた守護聖女ホワイトブレス。しかし内心では顔を真っ赤にして全身を抱き締めて隠してしまいたい状態だった。

成長し大人になり熟れ始めた身体。聖気で変身してのコスチュームのサイズは過去に活躍していた少女時代のモノであり、何故か今の身体には合わせてくれない。

たつぷりとした乳房はコスチュームの中で大人しくはしてくれずに、激しく動けばすぐにでも乳首を零れ出させてしまいそうで、スカートの中のレオタードも容易^{たやす}く露出するだろう。

悪と戦うコスチュームのはずなのに、自身の身体の成長もありまるで拘束具を思わせる状態。それだけ肌の露出が多いというのは、もう三十を過ぎた守護聖女にとっては恥辱以

外の何ものでもなく、人々を守る為には思っている、愛する夫も存在する中で意識しないわけにはいかない。

「悪を裁く白き心。守護天女ホワイトハート!! わたし達が来たからには悪の怪人の好きにはさせないんだからっ!!」

ほぼ同時に降り立ったもう一人のヒロイン。守護天女ホワイトハート。

ホワイトブレスよりも少しばかり身長は低くまだ学生を思わせる顔立ちだが、その豊満なボディは引けを取らない。

桃色の髪をリボンで留めてポニーテールとし、白のワンピースタイプのコスチュームが赤いフリルやリボンで飾られている。

白いロンググローブに赤いロングブーツ。そしてホワイトブレスと同様に胸元にはハート型の宝石が輝きを見せていた。

ホワイトブレスに比べれば露出はまだ少ない方であるが、それでたっぷりとした肉づきのよい身体は隠すことはできずに、コスチュームを押し上げる乳房が特に顕著だ。

しかし母であるホワイトブレスと違い、ホワイトハートは特に気にする様子はなく、ビシッと白いロンググローブに包まれた手で、怪人を指さす。

「キシキシッ!! ようやくのお出ましだな。ホワイトブレスにホワイトハート。お前達は

今日ここで、このラネク様の手で終わらせてやる!!」

二人の変身ヒロインの姿を前にして余裕を崩すことなく、蜘蛛の怪人ラネクは笑い歓迎するようにして多数ある腕を大きく広げた。

ある日唐突に復活を果たした『ディストピア』。その怪人の一体であろう。

平和な日々を送ってきた白守早苗。そして早苗から多くの聖気を受け継いだ白守心。

ホワイトハートに聖気の大半を受け渡す結果になったが故に、戦闘力は大幅に弱体化してしまっているホワイトブレスだが、それでも平和を守る為に戦うことを選んだのだ。

(この自信……糸で拘束している人達を人質にするつもり……? いえ、何かあるにしてはもまずは助けださないと)

今まで戦ってきた怪人達。その誰もが自分の勝利を疑わずに勝利宣言をしてくる者ばかりだった。

つまりは実力に自信があるか、何かしらの策があるかになるのだが、とにかく今は蜘蛛の糸に囚われている人を助けなければ。守護聖女はラネクに意識を向けつつも周囲を確認する。

「ハート!! 私は囚われている人達を助けるから、その間は怪人を――」

「まっかせて!! ブレスの邪魔はさせないんだからっ!!」

「糸に気をつけてッ!!」

母親の言葉を遮り一直線にラネクへと駆け出すハート。短いスカートが浮き、中の純白の下着が僅かに見えるが、それを気にせず両の拳に聖気を込める。

聖気によって成長し強化された身体。超人的な加速でラネクへと突進する守護天女だが、単純な攻撃に対してラネクが何もしないわけがない。

「馬鹿かッ!! 真正面から来るとはなァッ!!」

まっすぐ来るだけであれば接近戦をするまでもないと、ラネクが牙を持つ口から強力な粘性のある白い糸を放射線状に放ち、ホワイトハートを掬めとらんとする。

そのまま直進すれば、守護天女の身体は罠にかかった餌のように蜘蛛の糸に拘束されるはずであった。

「何イツ!？」

しかし、ホワイトハートはスピードを緩めることもかわす素振りも見せなかったと思えば、急にラネクの視界から消えた。

いや消えたのではない。糸が拡がりきる前にと身を低くして、スライディングの要領で回避しながらも蜘蛛怪人へと接近をしたのだ。

「やあああああッ!!」

勢いでスカートは完全に捲^{まく}れて下着を露出させながらになってしまっているが、ホワイ
トハートは両手を地面につけて体勢を変え、ラネクの身体を中心へと目掛けて脚を揃えた
状態で蹴りを放つ。

「ググウッ!？」

一瞬見失ってしまった為に反応が遅れ、回避ではなく防御を選択したラネクが六本の腕
で身体を守りを固めた。しかし聖気で強化された一撃を完全に防ぐことは不可能で、怪人
の肉体といえど後方へと弾き飛ばされる。

「このおおっ!!」

ラネクの間を見逃さずに、キックの後すぐに追撃せんと再び怪人目掛けて駆け出すハ
ト。

先の糸の攻撃だけは喰らってはいけないと自分に言い聞かせ、視線は基本的には糸を吐
き出す口へ。しかし他の警戒も怠りはしない。

（わたしはまだまだ戦ってないから、色んなことに気をつけなさいってお母さんから言わ
れてるもんね）

過去の経験を活かしての母からのアドバイスを心に刻み、ハートは自身にできる精一杯
で怪人と戦う。

恐怖がないわけではない。けれど、大切な友人や隣人、そして家族を守る為に白守心は正義のヒロイン、守護天女ホワイトハートとして悪と戦うことを選んだ。

愛する母もまた一緒に戦ってくれる。その安心感もあり、守護天女は受け継がれた強力な聖気を用いて目の前の敵へと拳を突き出す。

「グっ、こいつ……!!」

手数だけで言えばラネクの方が圧倒的に優位であるが、それを補って余りある聖気によるパワー。

事前の情報でもわかっていたことではあるが、まともに受ければ多大なダメージを負うことを確信したラネクは、できる限り受け流し回避に専念する。

「やああっ!! はあっ!! えええいつ!!」

相手が反撃をしてこない状況。今は攻める時だとホワイトハートは一時も休ませまいと、両拳に加えて時に蹴りを混ぜてラネクをホワイトブレスから遠ざける。

「きゃっ!？」

近距離で再び放たれた糸に反応して横にステップを踏んでかわすも、僅かに距離が離れてしまった。

すぐにでも再度詰めなければと思ったが、ラネクの行動にハートは目を見開く。

放たれた糸をその手に持ったかと思えば、まるで鞭のようにしならせ守護天女目掛けて横薙ぎに振ってきたのだ。

咄嗟^{とっさ}に身を低くしてかわすも、そこに目掛けて新たなる糸が一直線に放たれるのを後退してかわす。

しかし今度はそれがまるで長い棒のように硬化し、ラネクの手によつて掴^{つか}まれた。新たな武器を生成した蜘蛛怪人が、白き天女へと糸の棒を振り下ろす。

「わわっ!? ず、ずるいよそんなのっ!!」

ただの糸ではなくそれを変化させて武器にする戦闘方法に驚き、先の攻撃から回避に専念せざるをえなくなったことに本音が漏れる守護天女。

「キシシッ!! 俺の糸がただの糸なわけがないだろう。さアどうするホワイトハートッ!？」

※

「この糸……素直に触れば私も危ないかもしれない。でも迷ってる時間はないわね」
囚われた人々の救出を担当するホワイトブレス。人数はそう多くはないけれど、問題なのは怪人の糸に拘束されているということ。

怪人の出した糸であればただの糸ということはないだろう。しかし迷って時間を無駄に

使うわけにはいかない。

守護聖女は聖気を強く手に込め、長く触れない為にも手刀の形で一気に糸へと振り下ろした。

「ッ!？」

結果だけと言うならば糸は切ることができた。しかし触れた時に確かに覚えた違和感に守護聖女は眉を顰^{ひそ}める。

（今の感覚は……）

僅かではあるけれど、確かに覚える脱力感。それを確かめる意味も込めて、囚われる人の周囲の糸を切る。

「大丈夫ですか!? しつかり!! ダメ……起きない」

支えを失った人を抱きかかえて声をかけるも意識は失ったまま。目を覚ます気配もない。一旦安全な場所で寝かせ次へ。チラとハートの方を向けばラネクが糸を武器として手に持っている。

「気をつけてッ!! この糸は恐らく聖気を吸収するようになってるわ!! 聖気を込めて対処して!!」

そう、触れた際の脱力感は聖気を失ったことによるもの。であれば、この怪人の糸に囚

われることはそのまま敗北へと繋がる。

守護聖女は娘である天女へと知りえた情報を告げ、すぐに援護へと向かえるようにと救助のスピードを上げた。

※

「えええっ!? このクモ怪人聖気も吸うの!？」

ホワイトブレスの助言に対して、ホワイトハートは露骨に嫌な表情を見せる。

糸を変化させるだけでなく、聖気も吸収するとなればますますともに触れるわけにはいかない。

どこまでも卑怯な能力をという苦々しい顔。けれどもここで注意を引けなければラネクはホワイトブレスに向かってしまうだろう。

「キシキシッ!! どうした、俺が怖いか？」

「バカにしないでよ。あんたなんか全然怖くないんだからっ!!」

蜘蛛の顔をしている為に表情はわからないが、声色から挑発されていると知り、守護天女はぎゅっと唇を強く重ね合わせた。

そうだ。たとえ相性が悪かったとしても倒す方法はあると、闘志は消えずにむしろ燃え上がる。

「なら無理やりにでも泣き喚く姿を見せて貰うとするかッ!!」

臆することなく正義の炎に燃える視線を送るホワイトハートへと、ラネクは嗜虐心しぎやくに満ちた低い声で答えた。

そのまま糸による鞭と棒による連続攻撃。鞭は足元を狙い、棒は宙に浮いたところを狙って。

「ええええええいつ!!」

「こいつッ……!!」

鞭の回避に関してはラネクの予想のままの跳躍。しかし次の動きに対して素の驚きが蜘蛛怪人の口から飛び出す。

ホワイトハートは頭部に向かって振り下ろされた糸の棒へと、聖気を込めた拳を突き出した。結果、糸によって作られた強固なはずの棒は、守護天女の強力な聖気によっていとも容易く破壊される。

「ブレスが教えてくれたもん!! 聖気を込めればこんなモノなんかッ!!」

確かに聖気が吸われる感覚はあった。しかしそれも一瞬であり、気にする量でもない。

「馬鹿め!! 壊したところで無駄だッ!!」

「わわッ!」

そのまま攻勢に転じようとしたハートへと放たれる特殊な蜘蛛の糸。近づく前に放たれた白い粘糸をスレスレで半身でかわし、手刀で切り裂く。

「そっちこそムダだよっ!! もうこんな糸効かないんだからっ!!」

母からの助言によって対処することが可能になったことで、より強気に蜘蛛怪人へと接近するホワイトハート。

聖気を纏った攻撃であれば糸は怖くない。しかし広範囲の場合だけは気をつけなければ。

ラネクの口を特に注視しながらも、守護天女は蜘蛛怪人の背後を取らんとする。

「チッ!! このガキイッ!!」

途中まで残った糸を束ねて硬化させた凶器が、横に移動する守護天女へと放たれた。

眼前に迫る鋭く白い怪人の武器。それを前にしてホワイトハートは避けることはなく、横から掴み地面へと投げ捨てる。

普段の白守心であれば不可能なことも、聖気によってすべてがパワーアップしている変身状態であれば可能。

「やあああぁっ!!」

ラネクの側面から聖気を込めての渾身の一撃。強く握り締めた拳に悪を滅する聖なる力

が集約する。

「グウウウウッ!!」

多くの腕によつての防御を選択するラネクを再び吹き飛ばすほどの威力。致命傷を与えられてはいないものの、確かな手応えにハートは地を蹴った。

※

（この人で最後……ハートは大丈夫そう。でも急がなくちゃ）

大分離れた場所で戦つてはいるけれど、優勢なのは確認できた。

ホワイトブレスは安堵しながらも早く合流しなくてはと、急ぎ最後の女性を糸の拘束から解き身体を真正面から支えた瞬間。

「——っ!? きゃあああああッ!」

気を失っているはずの女性の口が大きく開いたかと思えば、大量の白い糸が放出された。意識の外からの攻撃。至近距離ということもあり守護聖女は回避することもできずに、蜘蛛の糸によつて大の字に磔とされてしまう。

（人の中に糸を……!? いえ、考えている暇はないわ。私が人質になったらハートが……聖気を込めて脱出しないと）

聖気を吸われる感覚に焦りを帯びながらも、全身の聖気を高めて糸からの脱出を試みる

守護聖女。

「ああああああッ!」

だが、意識を集中しようとした直後、先に経験したモノとは比べ物にならない量と速度で全身から聖気が吸われる感覚に堪^{たま}らずに悲鳴があがった。

「ぶ、ブレスっ!? ああぐっ!」

母の悲鳴に、娘だからこそ敏感に反応してしまうハート。意識が逸れ隙を突かれラネクの拳の一つが深々と脇腹に突き刺さってしまう。

「キヒヒヒ!! どうやら罠にかかったようだな。俺の糸に捕まった奴は時間が経てば糸が体内に入り俺の意のままに操れるようになるのさ。ホワイトハート。お前のお仲間は俺の糸に囚われて、大事な大事な聖気を吸われてしまっているぞ」

「そんな……うぐうっ!? はあ、あぎっ!? う、あうっ……ひやぐっ!」

先の悲鳴から恐らくは事実。早く助けに行かなければという焦燥感に駆られ目の前のラネクの攻撃に集中できず、防戦一方となる守護天女。

六本の腕からの攻撃の半数は防御することはできても必ず空く場所が生まれ、腹部、脇腹、時に脚によって太腿にとダメージが蓄積していく。

「そろそろ、早く助けに行つてやらないと俺を倒す聖気がなくなってしまうかもな!!」

（そうだ……わたしがこいつを倒さないと……お母さんが……!!）

中途半端に助けに行くんじゃない。ここで倒してから行くという決意。

「はああああああつ!!」

「こ、こいつ……ッ!」

一気に跳ね上がる守護天女の聖気。可視化できるほどの聖気がまるで羽衣のようにホワイトハートの身を包む。

圧倒的な力を確信させる姿に、一瞬気圧される蜘蛛怪人。普通に戦えば間違いなく苦戦から敗北は必至だと理解するも、逃げることはせずむしろ笑みすら浮かべていた。

「おっと、いいのか？ その力で俺を倒したいみたいだが、お前の仲間は人質になっているんだぞ？」

「うっ……!! ひ、卑怯だよ……そんなの」

途中まで突き出した拳がとまる。人質という言葉はホワイトハートにとって弱点以外の何ものでもない。それも相手は愛する母であるホワイトブレス。

決意に満ちた表情は弱々しくなり、行き場を失った拳は宙でとまったまま。

聖気を吸われる以外にも何かあるのではないか。この怪人の意志で囚われたモノをどうにかできる可能性を考えれば、当然の反応。

「わ、私のことはいいから……ああああっ……た、戦って、ハート……んああああっ……!!」

（だ、脱出する為の聖気が込められない……わ、私がハートの足を引っ張って……お、お願い、戦って……!!）

ハートに多く受け継がれた聖気。ホワイトブレスに残るのはそう多くはなく、何日間か溜めた聖気を解放して、少女時代の姿に戻り強い力を得ることができる。

しかし、解放する為には意識を集中する必要がある、蜘蛛の糸に囚われ聖気を吸われる感覚に苦しむ今は不可能。

ならばせめて自分のことは捨てて怪人を倒して欲しい。すぐに倒せば大丈夫であろうという希望をもって叫ぶ。

「だそうだ。どうする？ ホワイトブレスを見捨てて俺を倒してもいいんだぞ」

明らかな余裕の態度がラネクを倒しても無駄なのではという不安に、実年齢がまだ幼い少女は押し潰されそうになる。

愛する母を失う恐怖に腕が震え、突き出した拳が力なくゆっくりと下がっていった。

「キシキシッ。利口だな。じゃあご褒美をくれてやろう」

「ひあああッ!!」

「ハートおっ!!」

完全に戦意を失った守護天女の背後に回ったラネクが大きく口を開き、白く柔らかな首元へと鋭い牙で噛みついた。

突然の鋭い刺激に声をあげるホワイトハート。同時に愛する娘が囚われたことに必死に叫ぶしかないホワイトブレス。

「んああああ……せ、聖気が、吸われて……な、何か、入ってきてるう……ああ……な、なに、これえ……」

「ああ……や、やめて……やるなら、私を……ひああ……」

「キシキシッ!! 聖気を貰う代わりに毒をくれてやってるのよ。正義のヒロインをマゾ雌に変える媚毒びどくをな」

何を言っているのかわからない。ただ一つわかるのは、聖気を吸われて嫌なはずなのに気持ちよくなってしまっているということ。

これが異常であるということとは間違いないのに、守護天女の脳内は桃色の肉悦が支配を始め満足な思考を許してくれない。

「……い、嫌なのに、身体……どうして、あつくなっちゃうのお……やだ、やめてえ……」
そもそもとして性の知識も皆無な幼い少女なのだ。自身の身体がどういった状態である

かも考えたところで答えは出ない。

ただただ、身体の奥底。特に下腹部からジンジンとした熱い疼うずきが肥大化していき、頬は紅潮し熱っぽい吐息が漏れる。

「キシキシッ!! やめるわけがないだろう。しかし初めて聖気を吸ったが、これは凄い力が溢あふれるみたいだ」

「んああああ……せ、聖気、吸われちゃってるのに……き、気持ちよく、なっちゃうのお……んああ、あああつ……あああ……だ、ダメ、だめええ……」

戦う為の力が吸われていく。母から受け継いだ、人々を守る力が消えていく。代わりに注入される媚毒の効果もあり、喪失感すらも守護天女を本人の意志とは関係なく興奮の渦へと呑み込むのだ。

「お願い……!! ハートは助けて……見逃してあげて……!!」

「馬鹿かお前は。邪魔な正義のヒロイン二人とも俺の手で終わらせてやる。お前は仲間も守れない無力感に絶望しているといい!! 無様ぶざまに叫びながらなア!!」

憎き正義のヒロインをむざむざ逃すなどあるわけがないと、ホワイトブレスへと視線を向けてわざと大声を響かせる蜘蛛怪人。

自分のせいで娘が捕まって聖気を吸われてしまっている惨めさ、無力さに、守護聖女の

表情は絶望に染まっていく。

「変に抵抗されても面倒だからな。もう少し聖気を吸ってから……ん？」

びくびくと弱々しく震えるホワイトハートの身体が、僅かに光を帯び始めた。

戦う為のモノでないであろうと感じたラネクが様子を見てみると、守護天女の身体が光に包まれたかと思えばその光は瞬時に弾けて消える。

「んん。この姿は」

「……あ……や、やだ……見ちゃだめ……見ない、でえ……」

「ああ……ハートお……」

そこにいたのは確かにホワイトハートであるのは間違いないが、違う存在でもあった。

先ほどまでは十代後半くらいであった姿が、今は十代前半といったところ。声もどこか幼さを含んだ愛らしいモノに近く。

今まで見たことも報告もなかった姿に、ラネクは一瞬驚きを見せるがすぐにニヤリと笑みを浮かべた。

「なるほど……そうか。ホワイトハート。お前はホワイトブレスの娘だな？」

「……ああ……ち、ちがう……わたしは、ホワイト、ハートお……ひあああああつ……

……!!」

（ば、バレちゃう……わたしが、お母さんの子供だつて……それは、だめなのぉ……）

聖気が半減すると相應に身体も元に戻つてしまう。莫大な聖気を持つていたが故に今までの戦いでこの姿を晒すことはなかったというのに、こんな状況で。

肉の高揚感によつて満足に思考も働かなくなっている中で、懸命に否定するが聖気を吸われる量が増えれば堪らない快感に嬌声きようせいが溢れた。

「そうでなければ弱くなつた状態で戦う理由にはならんが、まアいい。時間が経てば答えも出る。どういう姿になるか楽しみだがまずは……」

ビュルルルルウウツ!!

一度ホワイトハートに突き立てていた牙を抜き、空中へと顔を向けると一気に大量の糸を吐き出し始めるラネク。

蜘蛛怪人と、囚われの守護聖女と守護天女の二人の変身ヒロインを包む形で瞬時に巨大な繭を形成した。

「一応逃げられないようにしておかないとな」

糸によつて作られた特殊な空間。もし糸の拘束から逃れても次には繭があり、それに対処するまでにラネクに追いつかれることだろう。

そもそもとして聖気を吸われ、最初の状態ですら脱出できていない状態なのだ。ダメ押

しの絶望が繭として二人のヒロインを包む。

「さア準備万端だ。ホワイトハート。お前のヒロインマンコを孕^{はら}ませてやろう」

「は、孕ませ……?」

「……まさか、やめて……!! やめなさいラネクツ!!」

わざとらしい宣言に人々を守護する二人の変身ヒロインは別々の反応を見せた。

何も知らない天女は意味がわからず、夫を持ち娘を産んだ聖女は最悪の未来に叫ぶ。

ビリリイイツ!!

「きゃあああああっ!! い、いやあ……コスチューム、破けちゃったあ……ひやううつ!!」

ラネクの手で聖気で作られたコスチュームの右胸部分が盛大に引き裂かれた。

たぶんっと、歳が若くなっても豊満な乳房が弾むように零れ、外気に触れた感覚すらも甘く守護天女の口から甘い声が漏れる。

媚毒の効果でがちがちに硬くなった乳首と胸を敵の手で露出されてしまうという羞恥は幼くとも感じるが、両手を頭の上で拘束されてしまい隠すことも不可能。

更にはM字に大きく開脚させられた状態で、囚われのホワイトブレスの前まで連れていかれるホワイトハート。

「よく見えるだろうホワイトブレス。お前の大切なお仲間のマンコは俺の毒でこんなにもグシヨグシヨになっているぞ」

「あああ……本当にお願ひ……私には何をしてもいいから……その娘は……ハートにだけは何もしないで……お願ひ、します……」

普段のおっとりとしながらも凜々しい表情は完全に消え失せ、目尻から涙を零しながら倒すべき敵に懇願する囚われの守護聖女。

ラネクの言葉どおり、まだ性も知らない守護天女の純白の下着は止め処なく溢れる淫蜜で濃く変色しており、既に異物を受け入れる準備は万端だ。

表情もとろとろに蕩けきっており、雄を待つ雌と第三者に言われても否定できはしない。愛する娘の淫らな姿を見たくはないけれど、ここで目を背けては見捨てたも同然だと、相手の狙いは二人だと理解していても自身を差し出す。

「いい声だ。お前のそういう無様な姿を見ると興奮してしまうなア」

「ひやううつ!! あ、熱いのが、あそこにい……な、なに、これえ……」

「ひっ……!!」

突如としてラネクの股間から雄々しくそそり立つ、まるで棍棒のような長く太い怒張が姿を現した。

ホワイトハートはとろとろの淫裂を熱い強直で擦りあげられ、それだけでビクンと身を跳ねさせてしまう。

未知なる刺激に対して未成熟な肉体と幼い脳内では答えは出せず、ただただ甘く鋭い肉の悦びに戸惑うばかり。

男を知るホワイトブレスは逆に、夫しか知らないにしても異常としか思えない形状と巨大さに恐怖を覚える。

「キシキシッ!! さア見ているホワイトブレス!! そして味わえホワイトハート!! これが俺の……怪人の最強チンポだッ!!」

ずぶぶぶううッ!!

「んひひひひひひひひひひッ!!」

「いやあああああああッ!!」

グイッとぐしよ濡れの白い下着がずらされたかと思えば、ホワイトハートの男を知らない未成熟な膣孔が、肉の凶器によって一気に貫かれた。

根本までガッチリと怪人の肉棒を突き入れられた衝撃。処女を散らされた痛みなど一切感じずに、脳を埋め尽くすのは体験したことのない極上の快感だけ。

ボゴォつと下腹部が肉棒の形に膨らんだのと同時に、ぷしゃあつと盛大に潮を噴き散ら

し挿入だけで絶頂したことを母と敵に知らせながら、ホワイトハートは愛らしくも下品な嬌声を響かせた。

一瞬で愛娘が女にされてしまった現実を目の当たりにし、無力な涙を流しながら悲痛に叫ぶ守護聖女。

そんな二人のヒロインの無様な声を楽しむラネクは、興奮のままに声を大きくする。

「キシキシッ!! 最高の締めつけだぞ!! ホワイトハートのヒロインマンコはなアッ!!」

ずっちゅ!! ずつぶ、ぐつぶ!!

「ひゃひいい!! んうふううっ!! わ、わたしのなかにい……あ、あつくて、ふといのがあ……きやはうう!! んあ、ああっああ!! な、なんで、どうしてええ……はひいああ!?!」

何が起こっているのかいまだに理解ができない。ただ、放尿するであろう部分に熱い何かがねじ込まれ、それが堪らなく気持ちいいという事実だけが刻み込まれた。

ラネクの腰が乱暴に打ちつけられる度に、ゴリゴリと膣壁が猛烈に擦りあげられ、潰れんばかりの勢いで子宮口が叩かれる。

一度の往復だけで虜とりこになってしまいそうな肉悦のスパークが繰り返され、声を抑えようと

いう思考すら生まれないう守護天女の口からは、絶えず惨めな悦声が押し出され続けた。

「いいかホワイトハート。お前の中に入っているのがチンポだ」

「ああっひ!! んああ、きやひうう!! ち、ちん、ぽお……おとおおっ!!」

荒々しい動きとは逆に、ゆっくりと教え込むような言葉。守護天女は拒むこともできず、喘ぎながら繰り返す。

「だ、ダメよハート!! ラネクの言葉を聞いては——んんむっ!!」

このままでは娘が淫らに染まってしまうという最悪の予感に声を荒らげるホワイトブレスだが、猿轡さるづつわのように糸が纏わりつき強制的に口を塞がれてしまった。

「今は黙っている。こいつに教え終わったらまた無様な声を聞かせてくれ」

「きやああっああ!! ああ、んああ!! おとおおっ!! ち、ちんぽお……ちんぽが、ごちゅごちゅくるううう!!」

何が挿入されているのかを言語化できたことで、まるで覚え込むように何度も繰り返す淫らな単語を口にする守護天女。

たぶたと豊かな乳房が喘ぎ声に合わせるようにして弾み、脳天で悦楽のスパークが延々と続く。

「そうだ。そしてチンポがぶち込まれているのが、オマンコだ。お前の身体にある気持ち

いい穴だからしつかり覚えろよ」

ぐっぢゅ!! ぢゅつぶ!! どぢゅうう!!

「きゃひううう!! んああつ!! お、おまんこお……!! ひやうう!! ち、ちんぽが、おまんこに……んほおお!! ずぼずぼされてえ……あああつああ!! す、すごいのお……おまんこ、びりびりしてえ……ちんぽで、めちやくちやになつちやうよおお……!!」

気持ちよくなつてはいけないと残る理性が必死に訴えてきている気がするが、逃れられない強力な肉の悦びが阻む。

こうして凶悪な肉槍に貫かれる為に生まれてきたのでは。そう思えるほどの快感絶頂の連続にホワイトハートの脳内は真っ白に染まっていくな。

助けを求めるようにホワイトブレスを見れば、口を塞がれ拘束された状態で、涙を流しながら必死に身を揺らして何かを訴えていた。

負けてはいけない。そう言われた気がしてこの快楽に抗おうと思おうも、それはすぐに無駄な決意であるとならされてしまう。

どっじゅ!! ずぶぶうう!!

「な、なにか……きちやうう……んおお、はひっいい!! 身体、しびれてえ……きゃああうう!! く、くるう……へんなの、きちやううう……あああつああ!! はへええ!!」

より強く、より乱暴に、多数の腕によって囚われたホワイトハートの身体がガクガクと揺さぶられた。

肉棒がより膣の深くまで叩き込まれ、今までの軽い快樂の爆発とは到底違う、最大級のモノがくるという確信が守護天女を襲う。

絶頂という言葉すら知らない幼い少女。ピストン運動の度に軽いモノが繰り返されていたのも気づかないまま、より強い快樂の予感にふるふると首を横に振る。

「イケホワイトハートツ!! 敗北し犯され無様にイっつてしまえッ!!」
ずぐぶうう!!

「きゃひうううううっ!!」

怪人特有の怪力によつて、まるで玩具のように身体を揺さぶられていたホワイトハート。今度はそれにラネクの腰の突き上げが加わり、単純に快感が倍增したように錯覚する。

それは同時に異常なまでの激感として結合部から全身に流れ、快感電流に支配された守護天女の顎あごがガクンと跳ね上がり視界には何も映らない。

「はへっ……あは……きゃうう……あ、あたまのなかあ……ばくはっ、しちやつたあ……」
敗北ヒロインの絶頂に合わせてラネクはピストンをとめ、蕩けて呆ほうけた表情のホワイトハートは脱力して桃色の悅樂に囚われる。

「今のはイクってことだ。これからは今みたいになる時にはイクって言うんだ」

「……はああ……ああ……い、いくう……？ は、はひい……」

媚毒によって感度が跳ね上がった淫らな肉体。今までとまることのなかった快感と絶頂の連続に息も絶え絶えの守護天女は、敵の言葉だというのにこくと力なく、素直に頷いてしまう。

「じゃあこれからが本番だ。お前のヒロインマンコにたつぷりと怪人のチンポ汁をぶち込んで孕ませてやる……そして」

「ひゃひいひいひいひいっ!? も、もう、聖気らめなのおお……あはああ……きやひううう……!!」

再び首元に牙を突き立てられ聖気が吸われ始める。強い喪失感に比例して快感も大きくなり、無様に悲鳴をあげるものの、突き刺さったままのラネクの肉棒をきゅつと締めつけた。

「さアホワイトブレスの前で怪人に孕まされる姿を見せてやろうじゃないか!!」
ずつぶ!! ぐつぶぬっじゅ!! ぱんぱんっ!!

「んああああ!! ああっ!! あ、あ、ああんっ!! ま、また、ちんぽごちゅごちゅくるううっ!! い、イクう……いつちゃうのおお!! あはひいひいひいっ!?」

聖気を吸われながら再開する乱暴なピストン運動。大切なモノを奪われる代わりに、敵の巨大な肉の槍に貫かれ、下腹部がボコッと膨らむ。

今まで味わっていた被虐の悦楽が単純に増えたのだ。より簡単に限界を迎えるのは当然であり、守護天女はラネクに教えられたとおりに言葉にしてビクビクと無様に絶頂の痙攣けいれんをする。

しかしそれでラネクの腰の律動がとまるわけではない。今度の目的はホワイトハートの子宮を怪人精液で埋め尽くすことであり、それまでは何が起ころうとも続けるだろう。

(……お願い……誰か、誰か心を助けてあげて……)

今も微弱な量ながら聖気を吸われ続けるホワイトブレスには、自分の出番が訪れるまで奇跡に縋すがることしかできない。

だが正義のヒロインが囚われている今、巨大な繭に包まれているこの空間内で一体誰が助けることができるだろうか。

強制的に雌としての存在を刻み込まれる愛娘。自分が犯される以上の絶望を前に、ホワイトブレスの瞳からも光が消えていく。

「いいぞ!! より締めつけるようになったじゃないかホワイトハート!! マンコも極上で聖気も最高とは……俺の雌になる為の存在だったようだな!!」

「きゃああつ!! ああつひ!! んひうう!! め、めすうう……きやうう!! ち、ちんぽす
ごいのおお!! お、おまんこお……ちんぽでいっぱい……!! ひやひいああ!! んほ
おお……!!」

ラネクの肉棒が完全に膣内を占領していると身体に理解させられている敗北天女。隅から隅まで怪人肉棒の熱や形を教え込まれ、どこからでも忘れられない肉悦を刻まれる。

「キシキシッ!! 俺も限界だ。このまま敗北ヒロインを孕ませてやろう!!」

「んひうううっ!? ま、また、ちんぽおおきくなってるうう!! お、おまんこ、もつと
ごりゅごりゅきへええ……!! あひっ!! はああ、ああん!! あん、ああっん!!」

流石さすがのラネクも邪魔だったヒロインを犯しているという興奮、更には極上の肉穴とあればいつまでも我慢はできない。

射精を告げる言葉と共に、守護天女は膣孔を犯す怪人の怒張が太さを増したことに気づき、押し出される嬌声はより高く惨めに響く。

「おっと、もういいだろう。そらホワイトブレス。お前もホワイトハートが孕む姿をしつかりと見ておけ」

「……だ、ダメっ!! それだけは絶対に許しません!! ハートの中に射精だしたら、この私が必ず滅してみせます……!!」

口を塞いでいた糸が緩むと、ホワイトブレスは怒りのままにラネクへと叫ぶ。

絶対に許さない。何が起ころうとも自分の手で倒してみせると言い放つ。

「それは楽しみだ。ならやってみせて貰わないとなア!!」

「んあああつ!! あああつひ!! きやううう!! ま、またイクつ……ずっと、いつちやうのおお……!! た、助け、てえ……ほわいと、ぶれすうう……ひやひついいい!」

絶頂を続けることで死んでしまうのではという恐怖に襲われるホワイトハート。しかし頑^{かたく}なに母であることを口にしないのは、最後の抵抗だろうか。

豊かな乳房をたぶたと、怪人の腕の中で弾ませ、潮も噴き散らしながら助けを求めるという正義のヒロイン失格の姿を見せる。

「たつぷりと味わえホワイトハート!! 正義のヒロインも終わりだッ!!」

ぶびゅうううううううう!! びゅぶりゅりゅりゅううううッ!!

「あきやあああああああつ!? あ、あついのが、おまんこにびゅりゅびゅりゅきてりゅうううッ!!」

ラネクの牙が離れたのと同時に、火傷^{やけど}してしまいそうに熱い、まるで蜘蛛の糸のように粘ついて貼りつくような白濁の汚辱液が子宮へと注がれる。

肉棒で犯されていた時以上に奥へ。そして子宮全体が征服され汚染されていく感覚。雌



として雄にマーキングされていると、何も知らないホワイトハートの本能が自覚してしま
う。

味わうのは圧倒的な多幸感。怪人の精液に体内で溺れてしまう感覚に、ホワイトハートの脳内もまた白濁に染まった。

「あ、あつくてえ……きもちよくてえ……も、もう、だめええ……!! い、いくいくいつくうううううん!!」

教えられた絶頂の言葉を連呼しながら、蕩けきった表情で涙を流し痙攣を繰り返す。

「あ、あああ……いや……いやああああああッ!!」

「キシキシシッ!! ホワイトハートはもう終わりだな!! 雌豚天女とでも名乗らせてやろうか!!」

あまりに大量なせいで結合部から白濁液をまき散らす様を目の前で見せつけられるホワイトブレス。正義のヒロインとしても一人の少女としても、怪人の肉棒と精液に穢けがされたという現実。

誰にも届かない悲痛な叫びは守護天女には響かず、蜘蛛怪人は更なる絶望を与えんと嗜虐の興奮に笑う。

「あああああつ……お、おなか、いっぱいにい……や、やぶけ、ちやうう……あ、ああ

あ……」

たった一度の射精だというのに、その時間と量は人間とは比べるのもおこがましいほど。子宮が満たされ下腹部が膨らんでいく僅かな苦しみはあるが、それを上回る悦感にホワイトハートの表情は常に快感に満ちている。

もう指一本動かすこともできないほどの脱力感に見舞われる守護天女だが、直後に再びその身に光を纏った。

ホワイトハートの力ない喘ぎと共に弾けて消える聖なる光。残るのは、完全に元の年齢へと戻った敗北ヒロインの姿。

「これが本当の姿ってところか。本当にまだガキだな……やっぱりホワイトブレス。お前のガキなんだろう？」

辛うじて身体を守る聖気だけを残し戦う力を失ったホワイトハート。幼い身体に巨大な肉棒は更にくつきりと下腹部を押し上げ、形を見せつけるようだ。

「んおお……はへっ……ん、ふあああ……」

ぱんぱんと浮き上がる部分を叩かれ、完全に肉の悦びに脳内を支配された敗北天女はただ甘い反応だけを見せる。

「……その薄汚い手を……いえ、その娘から離れなさいラネク……!!」

怒りに満ちた守護聖女の言葉に対して、ラネクは一切物怖じする様子はない。

何事もなく相對しているのであればわからなかったであろう戦闘の結果も、今この状況では誰が見ても明らか。

「言われなくても次はお前だからな。一旦こいつはポイだ」
ずりゆりゆつ。

「んおおおつ……あはあ、ひああ……」

巨大な肉竿が引き抜かれ膣壁が擦られる悦感だけですら、ホワイトハートは軽い絶頂を
してしまう。

溜め込まれていた白濁液がぽっかりと開いた膣孔からごぼごぼと溢れ出し、どれだけ大量に注がれたのかというのを見る者に教えるようだ。

そのまま地面へと落とされる守護天女は、両腕両脚が力なく曲がった状態で仰向けに倒れ、もしもの為にと四肢を糸で拘束される。

まだまだ幼く雄を知ることとはなかったであろうヒロイン。幼くも育った乳房を震わせ、剥き出しの恥部を母である守護聖女に見せつける形で拘束されても、彼女は完全に意識を失ってしまったている為に隠すこともできない。

代わりにと守護聖女は囚われていた糸から解放され、ようやくの自由を得る。

「この……貴方は……貴方だけはこの私……守護聖女ホワイトブレスが絶対に倒してみせますっ!!」

「キシキシッ!! いいだろう。ならば一発好きにさせてやる。あの伝説の守護聖女ホワイトブレスの力を見せてくれ」

もう聖気も少ないことは自覚しているが、守護聖女は怒りを抑えることができなかった。完全に油断している。残る聖気を右の拳に込めて一撃を。それだけを考えてホワイトブレスは憎き怪人へと駆け、その顔面目掛けて渾身のパンチを放つ。

ドゴォッ!!

「……このまま一気に……!!」

普通の女性が放てるとは思えない重い音。拳に伝わる確かな感触に、ホワイトブレスはラネクにダメージを与えられたと確信する。

このまま続けて攻撃をして倒しきるという考えで、左手にも力と残る聖気を込めた。しかし……。

「なんだそれが本気か？」

「え……そんな……うぶうううううっ!!」

ズドオオオオオッ!!

何一つ変わらない声色が守護聖女の背筋を凍らせ、気づいた時にはラネクの拳の一つがホワイトブレスの腹部へとめり込んでいた。

両手で腹部を押さえガクンと膝から崩れ落ちるホワイトブレス。カッと目を見開き開いた口から唾液をポタポタと零れ落とし、普段のおっとりとしたモノでも先の怒りでもない、激痛に表情を歪ませる。

「こ、こんな……げほっ……ごほっ……!!」

（いくら聖気を吸われてしまったからといっても、なくなったわけじゃないのに……まさか）

聖気が空で普通の人間の状態というわけでもないのに、一発で圧倒的な実力差を思い知らされてしまった。

弱体化しているとはいえ、ここまでの差を感じる相手とは出会ったことはない。そこで守護聖女に一つの、最悪の可能性が浮かび上がった。

「まさか……貴方、聖気を……」

「そのまさかだ。お前達から奪った聖気は俺の力になってパワーアップさせてくれているのよ」

ホワイトブレスを殴りつけた拳を強く握り締めてアピールするラネク。

「そんな……聖気を力に変えるだなんて……」

「まあちよつと時間にかかるんだがな。だがこれで今の俺に勝てる奴はいない……守護聖女ホワイトブレス。勿論、もちろんお前も絶対に勝つことはできないッ!!」

「あうううっ……な、何を……きやあああああぁあつ!!」

銀に変化した髪を乱暴に捕まれて無理やりに身体を持ち上げられる。そのまま再び暴力の渦に吞まれるかと思えば、ラネクの手でコスチュームの右胸の部分が乱暴に破り捨てられた。

たぶんっとコスチュームの中で苦しそうにしていた熟れた豊満な乳果実が弾け、憎き敵の前で露出する恥辱に悲鳴をあげる人妻聖女。

「ホワイトハートと同じように破いてやった。これで母娘お揃いだな」

「あ、貴方は……最低です……!!」

自由な両腕で見られまいと抱き締めるようにして隠すも、できることはそれだけ。

（悔しい……心を犯した相手に好きにされて何もできないだなんて……）

ドサリと地面に落とされ、頬を紅潮させながらもキツと闘志を消さずに睨むホワイトブレスだが、逆転の手立てはない。

自分が全盛期であればまだ違った。毘にかからなければこんなことにはならなかった。

そんなもしものことだけが頭に浮かび、どれもが現状の打破とは関係がなく惨めな気持ちになってしまう。

「お前にとつては最低でも俺にとつては最高のさ。ホワイトブレス。お前にも雌としての敗北を味わわせてやろう」

「くっ……!!」

仰向けに押し倒され、両腕が頭上で万歳状態でラネクの腕に押さえつけられる。隠していた乳房が勢いでぶるんつと弾んだ。

「……貴方が何をしようとも、私は絶対に屈することはありません。必ず貴方を倒して——ひううううううっ!!」

敵を見上げる無様な姿でも正義の意志を示す守護聖女。しかしうるさいとばかりにラネクによつて露出する乳首が噛みつかれたことで、雌としての声が出てしまう。

「あつ……や、やめ、なさい……これ、ハートと同じい……!! せ、聖気が、吸われて……か、身体、熱くなつてえ……」

（そんな……一瞬でこんな……き、強力すぎるわ……あ、あそこが、疼いちやう……）
噛みつかれ、瞬時に送られる媚毒によつて即座に発情状態にされる人妻ヒロイン。

全身が熱く昂^{たかぶ}り、当然のように子宮がきゅんきゅんと疼き出し、とろとろと淫蜜がレオ

タードの布地を濃く変色させ始める。

「ホワイトハートと違ってお前は男を知ってるからな。何が起こってるかわかる分、余計に効くだろう？ 乳首がもう硬くなっちまっているぞ？」

ぐぐうつ!!

「んひいいいいいつ!? ち、乳首い……そんな、強く噛んではダメえ……あ! あん、ああつ、ああつん!! せ、聖気が、毒があ……」

完全にガチガチに勃起した乳首がより強い力で噛まれ、ビグンと豊満な身体を跳ねさせる守護聖女。

過去に夫と愛し合った時とは比べ物にならない被虐の快感。ラネクが遊ぶように小刻みに噛むと、その連続した刺激で堪らずに敗北の嬌声を響かせてしまう。

（だ、ダメ……こんな怪人に好きにされて……喘いじゃいけないのに……私の身体、言うこと聞いてくれない……）

夫しか知らない身体ではあるけれど、女としての知識も経験もある。それ故に、自分の身体が異常に興奮していること、ただ乳首を噛まれているだけですら絶頂してしまいそうなのだと理解できてしまう。

「どうした？ 俺を倒すんじゃないのか？ こんなに乳首を硬くして何が屈しない

ぐにいつ!!

コスチュームに隠されていた乳首も、既に完全に勃起して布地の下から主張していた。それを力任せに太い親指と人差し指で挟み、潰されたことで守護聖女は隠すことのできない絶頂を刻み込まれてしまう。

ぐ
い
い
い
い
ツ
!!

ぎ
ゆ
う
う
!!

(い、イっちゃった……乳首で、こんな簡単にイかされちゃった……ごめんなさい、あな
た……心お……)

口では否定しようとも頭の中でイってしまったのだとわかってしまっている。

正義のヒロインとしての丁寧な口調も、媚毒による敏感な身体に快感の連続で普段のモノに戻りかけ、余裕がなくなっていることは誰の目にも明らか。

屈すまいという強い精神も、痛みすら快感に転化する怪人の媚毒によって溶かされてしまう。

「こんなデカ乳ぶらさげてるんだ。俺の肉便器になるのがお似合いなんだよ!!」

ぎゅむううう!!

「んひいあああつ!? む、胸も、潰されてええ……!! こ、こんな、凄すぎるう……ああ!! はひつ!! んああ、ああっん!! んふうああ!!」

乳首を押し潰されていたかと思えば、今度はそのまま驚掴みにされて乱暴に揉み捏ねられ始めた。

当然のように乳首も巻き込まれて潰れ、乳悦は次々に増え、肥大化して守護聖女の脳内を快楽で満たし続ける。

（こんな、乱暴にされてるのに……それが、堪らなく気持ちいいなんて……毒のせいなのに……わかってるのに、あの人にされている時より身体が熱くて痺れちゃう……!!）

愛し合う二人の行為とは別。自身の玩具としか思っていない乱暴な手つきで豊満な乳房

が形を歪ませられ、蜘蛛怪人の指の間から白い乳肉がはみ出る。

だというのに身体は歓喜に震え、もつと欲しい。もつと乱暴に、もつと激しい快感を求めた。

それが夫を裏切ることだとわかっていても、今の自分の身体を、ホワイトブレスは制御することはできない。

「さて、もう準備はできたようだし。守護聖女の人妻マンコを味わわせて貰うとしようか」
「あ……はあ……うつ……そんな、さつきよりも……大きく……」

仰向けに倒れたまま甘い吐息を漏らす敗北ヒロインの視界に映るのは先ほどまでホワイトハートを犯していた怪人の巨肉棒。

愛する娘を犯した憎きモノ。テラテラと、愛液と精液によって淫らに鈍く光る人外のそれはしかし、明らかに数段太さを増していた。

「お前の娘の処女を奪ったこいつで、お前の人妻ヒロインマンコも滅茶苦茶にしてやろう。母娘仲良く怪人のチンポケースというわけだ」

「……や、やめ、なさい……そんなモノで、壊れてしまいます……」

まさに凶器。雌を壊す為に存在するのではと思える肉の槍を相手に、ホワイトブレスはゴクリと恐怖に唾を飲み込む。

しかし、理性が恐怖を訴えるのとは別に、身体は雄々しすぎる象徴に対して屈するように、子宮の疼きが増して全身の火照りが抑えられない。

「こうして愛し合うような形で犯し、人間では到底味わえない怪人の味でお前の旦那の貧相なモノを消し飛ばしてやる」

「……あの人を馬鹿にするようなことを言うのは……やめなさい。そんな、改造されたモノで……比べるなんて、おかしいと思わないんですか……」

普通の人間でもない特殊な存在。比べることがおかしいのだと主張する守護聖女。しかしラネクは構わないとばかりに笑った。

「なんとでも言うといい。お前の身体にこの怪人チンポをぶち込むのは変わらないんだからな」

お互いに向き合い、仰向けの女性に覆い被さる形で男性が肉棒を挿入するという、定番とでもいえる体位。

ホワイトブレスが夫と愛し合う体位でもあり、同じ形で怪人に犯されるというのは屈辱でしかない。

ガッチリと両腕は万歳状態で押しつけられ、逃げることも恥部を隠すこともできない状態で、レオタード部分が破り捨てられ愛液に濡れる膣が狙われる。

(……あなたお願い……心の為にも、私を守って……!!)

心の中で笑う愛する夫。こんな強引な手による陵辱に屈するわけにはいかないと、正義が勝つ為にも心を強く持つ為に思い続ける。

「喰らえホワイトブレスッ!!　これがホワイトハートを犯し、お前を孕ませる怪人チンポだッ!!」

ズブズブズブウウツ!!

「んひひひひひあああああつ!？」

ガツチリと腰を掴まれ、一気にラネクの腰が打ちつけられて怒張に膣が埋め尽くされる。ぼごおつと下腹部が陵辱者の象徴の形に膨れ上がり、人妻聖女は今まで味わったことのない雌の快感に襲われ、限界まで身を反らすように暴れながら抗うこともできずに絶頂した。

(……う、嘘……こんな、こんな知らない……奥にまでぶつかって、子宮が、あそこが、全身が悦んじやつてる……)

媚毒のせいだとわかっていても身体に刻まれる巨大な肉悦は本物。夫では届かない場所。夫では擦れない壁。夫では味わえない熱さ。

比べたくないのに、自動的に身体が愛する夫の肉棒と怪人の肉凶器を比べてしまう。

普段ならば跳ねのけられる怪人の異形も、媚毒に支配されて快感を全身全霊で求める今、身も心も惹かれ始めるのは当然のことだった。

「キシキシッ!! イったなアホワイトブレス。お前のヒロインマンコは俺のチンポを締めつけて放そうとしない。それだけこのチンポが好きということだな?」

ラネクの言葉は事実。ただの挿入だけで快感が爆発し、更なる肉悦を求める人妻ヒロインの膣は、きゅうきゅうと陵辱者の剛直を締めつける。

「……はあ……ち、違い、ます……だ、誰が、貴方みたいな怪人のモノを……好きだなんて……」

（お、お願い……こんな怪人の好きにさせないで……私の身体、お願い……耐えて……）それは不可能なことであると理解しながらも、人妻聖女は心の中で願う。こんな肉棒に負けてはいけないと。

「初めから全力でいかせて貰うぞ!! 俺のチンポ穴になつてしまえホワイトブレスッ!!」ずぶぐう!! ぱんぱんっ!! どっじゅぐつぶ!!

「んああああっ!! あ、あそこ、壊れっ……んおお、ああっひ!! んああ、んひいああ!! し、子宮、潰れえ……おとおおっ!! んおおおッ!!」

ラネクの全力ピストンが始まると夫しか知らないホワイトブレスの膣孔が、より強い雄

の形を刻み込まれる。

腰を引かれると内部がすべてこそぎ落とされるような凶悪な刺激に、突き入れられれば子宮口が押し潰されそうなほどに強力な亀頭とのキス。

何もかもが初めての快感であり、怪人の肉棒の形になるというよりは、肉棒によって壊されてしまうのではという不安に襲われる。

しかし、そんな不安すらも壊し快感だけが全身に響き、普段出したことの無いような下品な嬌声を出してしまう守護聖女。

「なんだその声は!? 正義のヒロインが出していい声じゃないんじやないのか!? それとも人妻ヒロインの本性はこっちだったということか!？」

「ひぐううっ!! あああっ!! ああん!! あん、あんっ!! んほおお!! ち、違っ… 私、そんなんじやあ…おおっほお!! お、おちんちん、やめてええ…っ!!」

（そんな…いくら感じやすくなってるからって、こんな声…で、でも、抑えられない…ラネクに犯されているのに…こんな、あの人みたいに優しくもない…乱暴にされてるのに身体が、悦んじやつてるの…あ、頭、真っ白になっちゃう…）

怪人の腰の動きが激しさを増せば増すだけ、快感は大きく、淫らな毒として敗北聖女を

蝕む。
むしば

つまりは乱暴にされればされるだけ肉悦は肥大化し、ホワイトブレスの身も心も狂わせていくのだ。

「こんなにもチンポを締めつけてアへ声を出すマゾ豚ヒロインが何を言っている。目の前で馬鹿みたいに揺れるその無駄肉もこうしてやろう!!」

ぎゅむうう!! むにゅぐううつ!!

「んひひひひひ!? む、胸もだなんてええ……!! んああ!! あひつ!! やああ、やあ
んっ!! だ、ダメっ!! これ、凄すぎるのおおっ!!」

再び始まる、乱暴な動きに弾む爆乳への驚掴み。ぐにぐにと激しく揉みしだかれる被虐の乳悦が加わることで、守護聖女はビグンと一際大きく身体を跳ねさせた。

(……お、おちんちんも、胸も……おかしいのに……おかしいのに、悦んじやうう……!!
ごめんなさいあなたあ……私の身体、ラネクに……狂わされちゃってる……)

抵抗する意志すらも消し飛ばす快感の連続。まだ犯され始めて時間は経っていないというのに、この激感に抗うことは不可能なのだと身体に直接教え込まれる。

何よりも恐ろしいのは、もっと欲しい。もっと苛^{いじ}めて。もっと快感を。もっと乱暴に。

そんな普通では考えられない内容が浮かび続ける。そしてラネクはそれを叶えてくれるのだ。

まるで今までの性の営みが遊びに思えるほどの濃厚な時間。毒のせいだとわかっているのに、自分がこれを今日まで望んでいたのだと思わせられてしまう。

「胸を揉んだら締めつけが更によくなったぞ!! 痴女みたいなコスチュームで戦う変態ヒロインはこうされるのが望みだったんだろう!!」

「んおおっ!! んひいああ!! あああ、くふううつん!! そ、そんなこと、ないいいっ…!! わ、私は…守る、為に…ほおおおっ!! おおっ!! ひぎゅううううっ!!」
グイイ!!

最後の一線を越えまいとする守護聖女の勃起乳首がラネクの手で押し潰される。

一瞬で性感帯と化した突起への刺激。悦感の爆発にガクガクと身を痙攣させ、絶頂を繰り返す人妻ヒロインだが、トドメの一撃はこれから。

「このまま子宮に怪人のザーメンをぶち込んでやるからな!! 二人目は怪人の子を孕むといいホワイトブレス!!」

「あああっん!! い、嫌あ…それだけは…怪人の子を孕むだなんてえ…!! い、いやいやいやあああっん!! んおお!! やああっ!!」

背筋が凍る。怪人の子を孕むだなんて。そんな現実が訪れてしまえば、正義のヒロインとしても愛する夫を持つ人妻としても終わり。



涙を流し必死に力を込めて逃げ出そうとするけれども無駄な行為。むしろ暴れようとするのを押さえつけんと、より力強く強引な刺激が刻まれてしまう。

「無駄だ!! 今のお前はもうただの雑魚ヒロインでしかない。俺の精液を受けて怪人の孕み穴になるしかないんだよ!! 終わりだ守護聖女!! 俺のザーメンの虜にしてやろう!!」
「あああつ……だめ、いや、やめてええつ!! あ、あの人以外の子供なんていら……
つ!! それも、怪人なんてええ……!! あああ、ああつ!! お、おちんちんが、膨らんでええ……!!」

もうなりふり構ってはいられなかった。涙を流しながら必死に懇願する敗北人妻ヒロイン。

しかし、ホワイトハートよりも恨みの強いホワイトブレスのそんな無様な姿を見れば、更に泣き叫ばせなくなるのは怪人ならば当然。憎き正義のヒロインの頼みなど聞くはずもなく。

びゅぶりゅりゅりゅうううう!! ぶびゅりゅりゅりゅうううう!!

「んひいいあああああつ!! せ、精液、なかにいいつ!! あ、熱いのが、どろどろはいつてきてええ……い、イクうう!! ご、ごめんなさい、あなたああ……い、いくいくイつくううううう!!」

射精された瞬間に、守護聖女の淫らに変えられた身体は理解する。

怪人の白濁粘液は夫と比べるまでもなく、雄として何もかもが上であると。

子宮を満たし火照る身体を内部から更に炙る熱さ^{あぶ}。何よりも勢いと量が異常で、まるでホースの口を押さえて出しているかのよう。

望んでいた白濁刺激により脳内はスパークを起こし、浮かぶのは絶頂の二文字であり、人妻聖女は愛する夫の顔を浮かべるも、悦楽の波に流され今まで以上に激しく身を痙攣させアクメを迎えた。

「これで邪魔な正義のヒロイン二人は終わりだな。さて、ここからは二人纏めて楽しませて貰うぞ。覚悟しろホワイトブレスにホワイトハート。身も心も完全に俺に屈服させてやるからな」

「……ああ……あ、赤ちゃん、いやあ……ああ、んおおおっ……」

悦楽の濁流^{だくりゅう}に呆然^{ぼうぜん}とするホワイトブレスに、ラネクの声は聞こえてはいなかった。

ただ、子宮に注がれた白濁液が着床し孕むことへの恐怖と嬌声だけが、口から漏れるだけ。

第二章 恥辱と屈辱の怪人出産

繭の中で犯され始めてから数時間が経過していた。

「んおおっおお!! ちんぽじりゅ……また、でりゅうう……!!」

「あへええ……ハートのおまんこから……怪人ざーめん、びゅりゅびゅりゅでりゅのお……」

今も繭に閉じ込められたままの敗北ヒロイン二人。彼女達はあれからひたすらに犯され続けた。

肉棒をねじ込まれた時には必ず膣内に。時に強制口腔奉仕こうこうほうしをさせられ口の中や、全身にもぶちまけられた。

髪や白い肌は穢れた精液でドロドロに染まり、コスチュームもグローブやブーツ、乳房部分の一部を除いて千切れて消えてしまっている。ホワイトブレスは片側の乳房は露出していないが、ホワイトハートは小さな胸がよく見えるようにと残る方も破かれてしまっている。

何よりも違うのは、その腹部。まだ子を宿したわけではないというのに、吐き出された

精液によってまるで妊婦のように膨らんでいた。

「キシキシッ。正義のヒロインが二人並んでケツを向けている姿もいいものだ。どうだ。そろそろこのチンポとザーメンに負けたくて認めるか？」

銀色の髪と桃色の髪。熟れた人妻ヒロインと幼いヒロイン。二人揃って蜘蛛怪人へと、豊満な尻果実と未成熟な尻果実を向け、ぽつかりと開いた膣孔から白濁液を溢れさせている、正義が敗北したも同然の姿。

「……わ、私は、ホワイトブレスは……まだ……あ、ああ……負けて、いま、せん……んおっ……」

「はへっ……わ、わたしも……ほ、ホワイト、ハートもお……か、怪人になんて、まけ、ないんだからあ……きやあう、ふううつ……」

声はとろとろに蕩け、表情もアへ顔を崩せずにいる状態。しかし、一人ならば崩れてしまいそうな状況も、母と娘は互いに励まし合い精神までは屈すまいと必死に耐えていた。

「そうか。ここまでされてまだ屈しないとは流石に舐めすぎていたようだな」

バチインッ!!

「んひいいいいッ!!」

「はへえええええッ!!」

三本ずつの腕で守護聖女と天女の二人の尻へと繰り出される力強いスパンキングによって、三つ分の掌の形に赤くなる人妻尻と幼尻。

絶頂の潮を噴き散らしながら、ぶびゅびゅつと残る白濁液もその勢いで吐き出されていく。

「そろそろ頃合いか」

無防備に雄を誘うようにふるふると震える二つのヒロイン尻果実を見ながら、ラネクは言った。

ドクンッ!!

「んぐううっ……な、何が……し、子宮で、大きくう……」

「あううう……お、お腹で、あばれてるう……」

元の体勢に戻った直後。子宮内で何かが暴れ出す感覚に、二人のヒロインは戸惑いながら両手で下腹部を押さえる。

「ま、まさか……ラネク……」

「言っただろう孕ませると。まさか怪人に孕まされて人間と同じ感覚で育つとも思っていたのか？」

膣内射精をされ続け、孕まされたのではという恐怖に脅えていたが、そこにはまだ現実

感はなかった。

しかし、怪人は甘い存在ではない。絶望を与える為ならばどんなことでもしてくるという現実を、改めて思い知らされる敗北ヒロイン。

「あああ……いや……こんな、お腹、膨らんでええ……んおおっ……どうして、孕まされて、気持ちよく……ああ、あっひい……!!」

子宮内で一気に育ち始める怪人の赤子。先ほどの精液腹よりもなお大きく、一度は子を産んだ人妻ヒロインすらも驚かせる。

「きやうう……あ、あぁっ……お、お腹で、うごいてえ……びりびり、痺れちゃうう……おおおっ!! い、いつちゃうう……きもちよすぎて、いつちゃうよお……!!」

本来ならば孕むような年齢ですらない敗北天女もまた、急激に膨らみ中で暴れられる刺激に恍惚こうこつの表情を浮かべていた。

「キシシシッ!! 完全に妊婦だな。俺の子は元気なようで何よりだ」

「……あ、ああ……もう、産まれちゃう……んおおっ……あ、暴れ、ないでえ……は、ハートお……」

早すぎる出産までの時間に、満足に構えることもできない。孕む快感に甘い声を漏らしながら、隣にいる愛娘へと声をかける人妻妊娠ヒロイン。

「……んあぁっ……す、すごいのお……お腹、いっぱいでえ……ひううつ……あ、あ、きやうう……!!」

悪に屈しなくとも快樂にはもう抗うことのできない妊娠幼ヒロインは、もう与えられる異常な快感に身を任せるだけ。

「ケツ向けて出産もいいが、どうせなら無様な姿を見せて貰おうじゃないか」

「……こ、こんな、格好……ひうう……何も、できないなん、てえ……」

出産間近の状態でもう身動き一つ取れない二人のヒロインは、ラネクの手で無様なポーズを強制される。

両腕を後頭部に組んでのがに股ポーズで、ホワイトブレスの太腿の下に、ホワイトハートの太腿。母娘妊娠ヒロインがお互いの腹部を擦りつけるようにしながらの、惨めな敗北姿。

もうこのまま望まぬ怪人の子を産むだけなのかという絶望に吞まれる守護聖女、そして守護天女の乳房へとラネクの手が伸びた。

びゅるるるるるるうううつ!!

「んほおおおおおおおつ!! ぼ、母乳う……こ、こんな、ことおお……!! い、イクうつ!! 母乳で、いつくうう……!! おほおおおおおおおつ!!」

「はへえええええええつ!! み、みるく、でちやつてりゅうう……わたしのおっぱいから……みるくでてりゅうのおお!! いくいくいつくうううううん!!」

ギュッと強く揉まれたかと思えば、まるで怪人の射精のように多量の乳液が二人のヒロインの乳房から噴出した。

間違いなく子を孕んだ証でもあるが、何よりも驚愕きょうがくするのは射乳による快感。媚毒に侵されているとはいえ、まるで理性や思考すらも消し飛ばすような魔性の肉悦。

白き二人のヒロインは、射乳快感にがに股ポーズでビクビクと身を痙攣させて絶頂する。「これで母体としても完全だな。さあ見せてくれホワイトブレスにホワイトハート。憎き怪人の子を産む無様な姿をな」

「た、耐えるのよハート……か、怪人の子を産んでしまったら……ああ、んおおっ……私達は、もう……」

「う、うん……が、がんばる……んああ、はひっいい!! で、でも、でもお……からだ、おかしいのお……んおおっ!!」

もう産んでしまえば後戻りはできない。そう思い必死に耐えようとする二人のヒロインだが、やはり口だけでしか抗うことはできなかった。

子宮内で育ったラネクの子が、強引に産まれようとしている。それをとめる術はなく、

体内で暴れられる被虐の悦感に下品な嬌声を漏らすだけ。

「キシキシッ!! 無駄だ。どんなに頑張ってももう遅い。俺に捕まった時からこうなることは決まっていたのだ。さあ俺の子を産み完全敗北しろホワイトブレス!! ホワイトハート!! そして俺の孕み袋ヒロインとなれ!!」

「あああああつ!! で、でるう……!! う、産まれちゃうっ……!! 怪人の赤ちゃんが、私からあ……んおおお!! おおおっほ!! す、凄いい……!! ぜ、全部、きもちいいだなんてええ……!!」

出産の痛みや苦しみを知っているホワイトブレス。だが得るモノは最高級の快感だけ。だからこそ、こんな異質な状況を否定しなかったのに、身体は出産の快楽を求めてしまう。びゅびゅつとたぶたと弾む乳房から母乳を噴き散らしながら、完全敗北の瞬間から逃れられない。

「お、おりてきてるうう……!! はへええ……!! も、もうでちゃうう……怪人のあかちやん、うんじやうのおおっ!! ま、まけちゃうっ……正義のヒロインなのに、まけちゃうおおっ!! んほおおおっ!!」

何もかもが初めての経験であるホワイトハートもまた、苦痛を一切伴わない、快感だけの出産を身体が求めているとわかる。

しかしこれを産めば完全に敗北するのだと。そうわかっていても、何もできない。幼ヒロインはその姿に似合わない出産シーンを怪人に見せつけるだけ。

蜘蛛怪人の子が膣口^{ちつこう}へと向かう、歪^{いびつ}な刺激に惨めなポーズで悶える敗北母娘ヒロイン。そしてその時は訪れる。

ずぶぐううう!! ぐぶぶぶううう!!

「んほおおおおおおお!! か、怪人の赤ちゃんっ……出産しちゃうううっ!! い、イクうう!! こ、こんな、耐えられないいいいい!! おほおおおおおっひいいいいいい!!」

「きゃひいいいいいいいい!! で、でりゅでりゅでりゅううう!! わたしのおまんこから……怪人、だしちゃうのおおおお!! いくいくうううう!! んおおおおおおおおっほおおおおお!!」

二人のがに股ヒロインの膣孔から、黄色い顔をした蜘蛛怪人の赤ちゃんが顔を出して淫らな液体に塗^{まみ}れて産まれ落ちる。

本来ならば激痛が走る状況も、二人の身体には昇天してしまいそんな快感だけが満たされ、その衝撃に誰も手を出していないのに母乳が噴出した。

「ま、まだ産まれるう……!! 怪人の赤ちゃん、まだまだ産んじやうううっ!! ご、ご

めんなさい、ごめんなさいあなたあ………こころお………んほおおおお!! 出産アクメ、とまらなひいいいいいい!!」

「お、おなかからずつとあばれてええ………!! イクうう!! 赤ちゃんいきしちゃうのおおおつ!! ま、まけちやつたのに………きもちよくていつちゃううううつ!! はへええええええええつ!!」

肉棒を挿入されていた時以上の悦楽。生物が不規則に膣壁を擦りながら暴れる被虐の恍惚。

一体何体産まれるというのか。今もなお膨らんだままの腹部ではラネクの子が暴れているのがわかる。

ボトボトと汚液に塗れて顔を出しては落ちていく異形の赤子。二人の母娘ヒロインは、一日も経たずして怪人の母親となったのだ。

「キシシシシッ!! いいぞ。もつと産め。そうしたらまた孕ませてやる!! いつ完全に屈服するかが楽しみだな!!」

もうかつて悪を倒した、おつとりとした人妻ヒロインも、戦う力を受け継いだ元気な幼ヒロインもどこにも存在しない。

ラネクの高笑い、敗北母娘ヒロインのアへ声。繭の中で正義のヒロインの完全敗北が決



定しながらも、まだボテ腹ヒロイン二人は怪人の子を産み続けていた。

※

「んおおおおつ!! い、イクうう!! も、もう嫌なのに、怪人のおちんちんでいつくうううう!!」

「んひひひひひひ!! お、おっぱいからびゅりゅびゅりゅでいつちやうのおおおお!! ひゃひひひひひひうううう!!」

あれからどれだけの時間が経っただろうか。既に一日は余裕で経過していると思えるが、敗北した母娘ヒロインにはそれを思考する余裕すらない。

穴という穴を犯され敏感になりすぎた身体は、もうラネクから送られる僅かな刺激にすら絶頂を覚える始末。

四つん這^ばいで爆乳をたふたと弾ませながら獣のように犯されるホワイトブレス。ホワイトハートは背後からラネクの手で、幼くも大きく育った乳房を強く揉まれ、母乳を噴出させられてしまう。

出産の回数はもう二桁を超え、正義の変身ヒロイン二人から産まれた異形達はすぐにデイストピアの本部へと送られていた。

「キシキシッ!! どうだ守護聖女共、そろそろこのラネク様のチンポに敗北したと認め

るか？」

何発射精しても衰えることのない肉棒。憎き正義のヒロインを屈服させる為に快感を刻む容赦のない責め。

既に身体は完全に媚毒に対して屈し、終わることのない悦獄に苛まれ、淫汁を噴き散らしアクメを続ける守護聖女と天女。

二人に投げかけられた、完全敗北を認めろというラネクからの勝者としての言葉。

「おほおおっ!! んおお、あへええっ!! わ、私、たちはあ……あ、貴方の、ような……おおおっ!! か、怪人に、負けたり……なんてえ……あああっ!! はひっ、んおお!!」
「んひいあああ!! や、やだやだやだああ……!! わ、わたしい……ひゃひいい!! はへええええっ!!」

無様な姿を晒し続けるヒロイン二人。ホワイトブレスは蕩けきった雌の顔を見せつつも明確に抵抗の意志を示すが、ホワイトハートは駄々を捏ねる子供のように、弱々しく悶えるだけ。

どちらにせよ、これだけ媚毒に侵されようともまだ完全なる敗北は認めないと、正義の心はまだ消えていないと訴える母娘ヒロイン。

「なるほど……流石はかつてデイストピアを倒したホワイトブレスとその娘ホワイトハー

ト。身体は堕ちようとも心は、というわけだな」

辛うじて残る正義の炎を燃やすヒロインの反応に対して、むしろ面白いと笑う蜘蛛怪人。
「このまま犯し続けられればいずれは堕ちるだろうが……いや、もっと楽しませて貰うとするか」

パァンッ!!　ぎゅううっ!!

「んほおおおおおおつ!!」

「ひゃひひひひひいつ!？」

獣のような姿で犯される白き聖女は、熟れた尻肉が波打つほどの強さで叩かれて潮を噴き、まるで蜘蛛怪人の所有物のように乳房を揉まれながら背後から抱きかかえられる白き天女は、母乳と潮を噴き散らした。

第三章 仮初の日常。敗北ヒロインを襲う淫らな欲望

「あなた、お帰りなさい」

白守家のドアを開け、おっとりとした美貌^{びぼう}を微笑ませて愛する夫を出迎える早苗。

今日は休みにして単身赴任の愛する存在が帰ってくる日であり、どこか早苗の頬も赤い。
「お父さんお帰りなさい!!」

早苗が鞆を受け取って両手が空いたところで、駆けてきた心が大好きな父へと飛ぶようにして抱きついた。

久しぶりに会えた興奮もあるのか心の頬もまた紅潮し、笑顔がより眩しく感じられる。

「今日のお夕飯はあなたの好きなモノだから楽しみにしていてね」

まるで見る者すべてを癒す慈愛の笑み。疲れているであろう夫を居間で寛^{くつろ}がせ、家事へと向かう早苗。しかし――

「んんっ……はあ、はあ……か、身体が……バレてないわよね……」

パタンとドアを閉めた途端に、悩ましい吐息を漏らしながら壁に体重を預ける人妻ヒロイン。

先ほどよりも明らかに赤みを増した頬。身体の内側から炙られるような淫らな熱が、早苗の全身を蝕んでいく。

（ラネクの毒が……残り続けるだなんて……どうにか、しないと……）

ラネクの罠にかかり出産アクメを繰り返し続けたあの日から、もう一カ月が経とうとしている。

何故か途中でラネクは撤退し、ボロボロの身体ではあつたけれど繭の中で回復した後、脱出したことで、世間的には守護聖女達が勝利したということになっていた。

あのまま調教されていれば、理性も悦楽に蕩けるのは時間の問題であつたのは間違いないのにどうしてという疑問は残る。

だがそれよりも変身ヒロイン母娘を悩ませたのは、媚毒の存在。

聖気の回復によってボロボロの身体は元に戻りはしたが、ラネクに流し込まれた淫らな毒だけは浄化することができなかった。

女としての快楽の多くを刻み込まれた二人は、常に敏感すぎる身体が発情するマゾ雌同然の状態のまま日常を過ごすことに。

自慰の回数が格段に増え、時に乳房や尻穴ですらも疼きを抑える為に弄ぶこともあつた。もてあそ
それはまだ幼い心も同様で、外で必死に耐えた反動で部屋で何度も慰めることになり、

当然、早苗もまたその声を聞き己の無力さに涙を流す日々。

（いつもより……身体が熱い……あ、あなたあ……）

久方ぶりに出会えた喜びからなのか、それとも雄の肉棒を身体が求めているのか。

早苗はドアの向こう側にいる夫を求めるように、熱を帯びた視線を這^はわせる。

※

夜。心が寝るまで三人一緒に過ごしていた白守一家。

安らかな寝息を立てる愛娘を起こさないようにとゆっくりと部屋を出た二人は、そのま

ま寝室へ。

お互いに服を脱ぎ、生まれたままの姿で抱き合う。

「んんっ……!!」

ただ肌と肌が合わさっただけ。ただそれだけなのに、抑えきれない悦感が全身に響き早苗から嬌声を出させようとする。

「ううん、大丈夫……久しぶりでちよっとドキドキしてるだけだから……」

普段は見せたことのない反応に驚く夫へと、早苗はゆっくりと首を横に振った。

（ごめんなさいあなた……嘘つきな私を許して……）

自分が変身ヒロインであること以外の隠し事などしたくはなかった。

心配してくれる愛する相手への罪悪感に苦しむ早苗であったが、身体を重ね合わせるセックスをとめるわけにはいかない。

（あなたので……あなたの愛で……ラネクのこと忘れさせて欲しいの……）

徹底的に犯し尽くされ、出産までさせられた。この身も心も目の前の愛を誓った男の為にあるのは間違いないが、それ故に穢れた記憶を上書きしたい願望が強い。

強く揉まれれば母乳が出てしまう。乳房のことは気にせずただ正常位で、愛し合う形でこの身体を癒して欲しい。

苦しむ心のことを思うとなんて身勝手な願いだろうか。しかし、それでも早苗はもう抑えることができなかった。

既に汗ばむ身体。ベッドの上で仰向けになる早苗の頬は当然赤く、誘うように細める瞳が雄の欲望を刺激する。たつぷりとした乳房は重力に従い形が僅かに潰れるように歪むが、それもまたすぐにでも揉みしだきたいという願望を抱かせるには十分。

「きて……あなた……」

既に愛液に濡れる蜜壺。明らかに普段以上に興奮を覚えているのを隠しきれない状態ではあるが、それは久方ぶりの夫も同じであった。

極上の身体を前にして、たとえば夫婦であったとしても雄の欲望を抑えることなど不可能。

今から挿入^いれるよと言いながら、限界までそり立つ雄の竿をまるで見せつけるように近づく夫。

(……あれ……おちんちん……あんな……)

その時を待ちわびる早苗だったが、完全に勃起しているはずの肉棒を見て一瞬目を見開いた。

ラネクのモノを相手にし続けてしまったが故の麻痺なのか、明確に大きさ、太さ、長さなどすべてを比べてしまう。

早苗の理性とは別に、媚毒に侵されている身体は巨大な快感を求めているが為に余計に目につくことになった。

ずぶぶつ。

「んあああつ!!」

そんな妻の胸中など知るよしもない夫は、愛し合う為に人間サイズの肉棒をじつとりと濡れる淫裂へと挿入した。

敏感な肉穴は当然のように快感を早苗へと刻み、ラネクに遠く及ばないモノであったとしても、強い悦びを得る。

「あああつ!! あん、あんっ!! あ、あなた……あなたあ……!! んんう、んあああ!!」

（ひ、久しぶりのおちんちん……身体が、悦んでる……ら、ラネクのなんかよりも、ずっと気持ちいい……!!）

ラネクから解放されてから一カ月。自分の手で慰めていた時の何倍もの快感に歓喜に震える身体。

こうして膣穴の内部を擦られる悦楽。指では到底届かない位置が刺激される、電気が流れるような感覚。

肉棒に触れるすべてが媚毒に侵される人妻を雌に変えんと悦ばせる。

そうだ。あんな強引に犯すことだけを考えていたラネクなんかよりもずっと気持ちいいと、そう思いながら愛を享受する早苗。

「あああつ!! あ、あ、あああつ!! もつと……もつと、奥までえ……はあああつ!!」

※

パンパンと肉のぶつかり合う音が聞こえる寝室の外で、本来存在するはずのない人影。桃色の髪に豊満な肉体を包むワンピースタイプのコスチューム。その場にいるのは間違はなく守護天女ホワイトハート。

両親を心配せんと寝た振りをしていた心だったが、トイレに行こうとしたところで音が聞こえたのだ。

白守心のままではなく、変身したのは快感がより得られるからか。パンツが見えるのもお構いなしにドアの外でM字に脚を開き、熱い吐息を漏らす口を片手で覆いながら、部屋の中の音を聞く。

（お母さんとお父さんが……ラネクにされてたのと同じこととして……あんなに、気持ちよさそうな声……）

あの日聞いた母親の淫らな声。肉悦に満ちた雌の声。自分自身もしつかりと刻みつけられた雌の証。

父親の肉棒を挿入され、母親が喘いでいる。そんな、本来であれば即座に離れるべき現場の前で、ホワイトハートは確かに興奮を覚えていたのだ。

「……んんっ……ふうう……んん、んっ……!!」

（お母さんがお父さんのちんぽで悦んでる……わたしも……欲しい……ちんぽでおまんこ……いれて欲しいのお……）

早苗と同様に媚毒に支配されている心にとって、セックスの快感を得ている母親のことは羨ましかった。

しかし、いかに幼いとはいえ部屋に入ってはいけないというのは理解でき、ドアの前でその声を聞くだけ。

母が肉棒を挿入されて出す喘ぎ声に重ね、ホワイトハートは自身の指を、下着をずらして露出した秘裂へと這わせ掻き回す。

既に濡れている幼い淫裂がぐちゅぐちゅと淫らな音を立て、同時に守護天女の敏感な肉体へと快感を流すのだ。

「……んんう……ふう、んあ……ん、んん、んふうう……!!」

（わたし……ラネクのちんぽのこと考えちゃってる……いけないことなのに、でもおまんこ気持ちいい……）

変身している為に普段以上に力を込めることができてしまう。己が求める快感には到底届かないが、それでも近づける為に不慣れな手つきで膣壁を擦り上げる守護天女。

その脳内ではラネクに犯され続けたあの日のことが鮮明に浮かび、どんどん指のスピードが増していく。

「ん、ん、んあつ!! ふうう……んんう、くふう……んん、んっんう!!」

（……ちんぽ欲しい……おまんこ気持ちいいのに、どんどんちんぽ欲しがって熱くなってるう……）

ポタポタと廊下へと垂れるオナニー天女の愛液。後でバレてしまうのではないかという証拠を残しているにもかかわらず、ホワイトハートはそれに気づく余裕はない。

M字に開いた脚。中心部分の淫裂を乱暴に掻き回すのに夢中であり、最早その頭には快感の二文字しか残ってはいないだろう。

※

ずつちゅ、ぐつちゅ!!

「んあああ!! あん、ああ、ああっん!! あああ、はあううつ!! あな、たあ……!!」
ドアの外で娘が一心不乱に自慰に耽^{ふけ}っていることにも気づかず、早苗もまた自身の快感を優先させていた。

愛する相手と繋がる幸福。一カ月間ポツカリと開いた空洞を雄の肉竿で埋めて貰える恍惚。

寂しさを覚えていた身体が満たされていくのを感じながら、全力で肉棒を締めつけてその形を確かめる。

「ううん……久しぶりで、嬉しくて……あ、あ、ああっ!! お、お願い……もっと、強く……して……」

今までここまで乱れたことのない妻の姿に僅かに驚きを見せる夫へと、早苗が乱れながらも優しい笑みを浮かべた。

けれどももっと欲しい。もっと強く、もっと乱暴に。媚毒に侵されたこの肉体は、今以

上の刺激を求めている。

「んあああ!! あ、ありがとう、あなたあ……んあ、ああっ!! あっ、あんあんああんっ!!」

こんなはしたない願いを聞き入れてくれた喜び。僅かではあるが強くなったピストン運動によつて、より激しい快感が膣孔から全身へと響く。

「……だ、だして……私の中に、あなたの精液……だして欲しいのお……んああ、あっああ!! あああっん!!」

しかし、夫もまた極上の肉穴を相手にしているが為に限界も早かった。射精を告げる言葉に対して、早苗は膣内へ出されることを望む。

そう、子宮もまた白濁液の熱を欲していた。たつぷりと注ぎ込んでイかせて欲しい。今の早苗の願いはそれだけ。

びゅるるうううっ!!

「んああああああっ!!」

しっかりと腰を打ちつけられた状態で、注がれる愛する相手からの精液。子宮に届く熱を帯びた白濁液に反応して、早苗もまた嬌声を響かせて絶頂を迎える。

「はあ、はあ……あ、ありがとう……あなたのこと、感じてる……んああ……」

ラネクのととは違う、生涯を共にする愛し合う相手からの精液によるアクメに幸せを感じる早苗。

ぬぷっと引き抜かれる肉竿に対して淡い嬌声を漏らす。

(……もう、終わりなのね……)

一発で終わりを迎えるセックス。今までもそうであり、これがきつと普通なのは間違いない。

しかし、今の早苗にとっては完全な満足にまで至ることはなかった。

「愛してるわ。あなた」

じつとりと汗ばむ人妻の熟れ始めた身体。セックスの終わりのキスを交わし、早苗が微笑む。

(……一度で終わりじゃ……ダメだなんて……私の身体、本当におかしく……ああ……もっと、太いのが……熱いのが、たくさん欲しがってる……いやあ……)

けれども、ラネクの毒と調教によりもう普通では満足できない身体になってしまっているのを、改めて思い知らされる。

確かに気持ちよかった。肉棒の感触で満たされた。だが、満足にはほど遠いモノ。

最低な願望を掘り出されたことで自己嫌悪に陥る早苗は、寝る時に夫の方を向くことが

できなかった。

※

「んんんっ!! んん、ふうう……んん、んっふう!!」

(お母さんイっちゃいそう……わたしも、もう……イク……おまんこでイクううっ……!!)

ドアの向こうのベッドで、母親が精液を注がれていつている。それを聞きながら、ホワイトハートもまた絶頂を迎えた。

ぷしゃつと潮を噴き、必死に声を抑えながらも全身はガクガクと震える。

完全に早苗と絶頂のタイミングをシンクロさせた娘ヒロイン。

(……だめ……全然たりないよお……ちんぽも、ざーめんも欲しいのに……)

そう、実際に肉棒を挿入され射精された早苗と違い、ただ自身の指で慰めていただけの守護天女。

早苗ですら満足できていないのに、自慰だけのホワイトハートが満足できるわけがない。チラリとドアへと視線を向ける守護天女は、よろよると膝に力を込めて立ち上がる。蕩けた瞳で自身の淫液で汚れた床を見つめて僅かな時間硬直していたホワイトハートは、自室へと戻った。



変身を解いた元の幼い姿の心がタオルを片手に廊下に戻り、静かになった両親の寝室を
今も興奮が収まらないといった表情のまま見つめる。数秒で床を拭き取った後に立ち上
ると、ふらふらと再び自分の部屋へと消えていった。

第四章 再戦。守護ヒロイン運命の日

翌日。今日も世間は休日らしく街には活気が溢れている。

白守母娘もまた、家族で買い物を終えて帰宅。これから夕飯を作り始めようかというところだった。

「あなた、ごめんなさい。ちょっと買い忘れた物があつて……心と一緒に買ってくるわね」
自分が買いに行こうかと言う夫に対して「あなたはゆつくり休んでいて」と返す早苗。
「すぐに帰ってくるね。今日もお父さんの大好きなのだって」

につこりと明るい笑顔を見せる心とおつとりと微笑む早苗が手を繋ぎ、ドアを開けて出ていく。

ボタンと音を立てて閉まる玄関のドア。それが日常との境界線を意味するように、早苗と心の表情に緊張が走る。

「この感じ……心」

「うん。きつとラネクだよ」

前に現れた場所辺りから感じられる邪悪な気に、二人がこくと頷き合った。

「前はこんなに強い気は感じられなかったのに……」

そう、家にいながらに感じ取れてしまう強大な感覚。前は現れて行動に移すまでわからなかったというのに、天と地ほどの差がある。

不安そうに呟く心。そうだ、今までにここまでの力を持った相手は存在しなかった。

「大丈夫よ。正義は必ず勝つ……そうでしょう？」

（でもこれは……あの時と同じ……いえ、それ以上……？）

早苗も、過去に相対したディストピアの首領を思い出していた。

強大な力を持った絶対的な悪。間違いなく最強の存在であったのだが、今感じるのはそれ以上に思える。

心を励ます言葉は力強いモノだったが、頬に流れる汗は隠すことはできない。

「うん。お父さんも帰ってきてるんだもん。絶対に勝とうね!!」

「ええ……!!」

勝利を信じて再び頷き合う母娘。そうだ。大切な存在がすぐ傍そばにいる。

自分達が敗北すれば夫の、父親の命も危ない。絶対に勝利してみせるという強い意志を瞳に宿し、二人の守護ヒロインは人目から隠れ変身を遂げる。

「聖女（天女）・転身っ!!」

※

「随分遅かったな。尻尾を巻いて逃げたかと思ったぞ」

今回は巢を作ることなくただ立ったまま、正義のヒロインの到着を待っていたラネク。周囲の人々は怪人が現れたことで避難したようで、周囲に人影は存在しない。

「誰が逃げるものですか。ラネク……今日は前回のようにはいきません。この守護聖女ホワイトブレスと——」

「守護天女ホワイトハートが絶対に勝つんだからっ!!」

悪を前にして天から降り立った二人の正義のヒロイン。前回二人の豊満なボディは目の前の怪人によって穢し尽くされた。

その記憶は消すことはできず、また身体も媚毒に侵されたまま。昨夜の熱もまた消えることはなく、ドクンと身体の奥底で何かが脈打つを感じてしまう二人の正義のヒロイン。けれどもそれを前に出すことはなく、憎き相手に勝利するべく意識を集中し聖気を高める。

「俺の毒でヤラれてるというのに強気なモンだ。今日はお前達に完全敗北というモノを味わわせてやる」

「あんなものの私達には通用しませんッ!! 聖気・解放!!」

「そうだよ。もう大丈夫なんだから!! はああああああつ!!」

ラネクを前にして巨大な邪気を感じるホワイトブレスとホワイトハートだが、それに怖
気ることなく高めた聖気を一気に解放した。

守護聖女はむちむちとした大人の色香に溢れる姿から一転、普段の白守心と同程度まで
肉体年齢が戻り、過去にディストピアを壊滅させた幼い姿となる。おっとりとした美貌と
はまた違う、他者を魅了する愛らしい表情に姿。

身体に溜め込まれた聖気を解放することで、全盛期の姿に戻り巨大な力を手にする奥の
手。発動の為には長い期間溜める必要があり、一カ月何もなかったのは幸運だった。

そしてホワイトハートは前回ラネクと対峙した時と同様に、聖気を羽衣のように可視化
させて纏わせる状態。

二人が共に最大の戦闘力を有する状態。邪魔な糸もなく完全なる二対一。卑怯などと言
つてはいられない。悪を滅することこそが、正義のヒロインの使命。

「ムチムチのエロボディもよかったが、過去に大活躍した憎い姿なのもイイじゃないか。
その状態のお前らを叩きのめして犯し尽くし、この俺に完全に屈服させてやる。キシシシ
ッ!!」

「この姿になったからには絶対に負けません。貴方達ディストピアは私とホワイトハート

が滅してみせます!!」

物陰に隠れて見守る人々の前で、正義と悪の戦いが始まる。

（今はなんとか耐えられているけど、長引けば不利なのはこっちの方。すぐに決着をつけないと）

今も身体を蝕み続ける毒は、感度もまた異常なまでに高めたまま。聖気の解放によって一種のトランス状態になったからか、短い戦闘であればなんとか耐えられるはず。

それはホワイトハートもまた同じ考えのようで、チラリと視線が重なると小さく頷き合った。

「学習能力のないヒロイン様に力の差ってやつを教えてやろうか」

「あの時とは違います!! 正義の力を受けなさいラネクッ!!」

「このおおおおおっ!!」

地を蹴るヒロイン二人の姿が消える。それだけの力を込めて一瞬でラネクへと距離を詰める白き聖女と天女。

相手が回避行動を取ろうともそれに合わせて二人の手数で詰め、急所を狙う。ラネクの手が六本あるとも身体は一つ。必ず攻撃を当てることができる。いや、できなければならぬ。

あの時の、攻撃を当てても通じなかった光景が脳裏を過るホワイトブレスだったが、その記憶すらも滅するように拳を突き出す。

「えっ……!？」

「あれっ……」

勝利を信じる全力の二人の一撃は虚しく空を切った。いや、それだけであれば攻撃を続けられただけ。

しかしそれは叶わなかった。守護聖女と守護天女。二人のヒロインの視界から、ラネクが完全に姿を消したのだから。

「どうした？ 俺はこっちだぞ」

背後から聞こえるラネクの言葉にビクッと過剰なまでに反応する母娘ヒロイン。

（そんな……まったく見えなかった）

そう、避ける動作もなく完全に消えたのだ。瞬間移動としか思えない、聖気解放によるパワーアップした自分達以上の速度。

自宅から感じ取れた巨大な邪気。その力が今まさに完全な実力差として表れているのか。（そんなわけない。今の私達なら、どんな相手にだって勝てるはず……!!）

正義のヒロインが二人。毒に侵されてはいるが、戦闘能力で言えば最高の状態。

いくらあの時に吸われた聖気によるパワーアップがあつたとしても、ここまでの差があるなんてことあるわけがない。

「くっ……はあああああつ!!」

「やあああああつ!!」

表情はわからないが醜惡な笑みを浮かべているであろうラネクへと、再び聖気を込めて攻撃を仕掛ける守護聖女と天女。

ホワイトブレスは拳を胴体に、ホワイトハートは跳躍しての蹴りを顔面に。今度は目の前で消えたりはしていない。ちゃんと見えている。

ドゴオッ!! バギィッ!!

激しい音を鳴らし、二人の渾身の一撃が完全にラネクへと突き刺さった。

通常の、いやどんな怪人であろうと無事では済まない文字通り必殺の威力を持った拳と蹴り。

「このまま一気にいきます!!」

「まだ終わらないんだからねっ!!」

だが、それで終わりだなどとは思っていない。攻撃が当たったのなら、ラネクが滅するまで続けるのみ。

幼い姿のホワイトブレス。成長した姿のホワイトハート。二人がそのまま連撃を繰り出そうとした時だった。

「フンッ!!」

ドゴオオオッ!!

「んぶうううええええええつ!」

「ひやぐううううああああつ!」

ラネクの声が聞こえたかと思えば、二人の腹部を中心に重い衝撃が全身に走り遠くまで吹き飛ばされた。

十メートル以上宙を舞い、ゴロゴロと地面を転がってほぼ同じ位置でとまる正義の母娘ヒロイン。

「げほっ……ごほっ……い、今……こ、攻撃を……?」

「……うええ……えうう……な、なにも、見えなかった……」

特に腹部に走る激痛に両手で押さえながらせき込むだけ。何をされたのか、ダメージを負った箇所から判断することしか二人にはできない。

コスチュームは攻撃を受けた衝撃だけで弾け飛んでしまったようで、たった一瞬でポロボロにされてしまっている。

身体を横にして痛みを和らげんと丸まる姿は、正義のヒロインとして無様なモノ。

すぐにでも立ち上がらなければならぬのを理解してはいるのだが。

「……た、立てない……そんな、たった一度でこんな……嘘よ……ラネクとの力の差が、こんなに……」

身体が言うことを聞いてはくれなかった。激痛が全身を支配し、なんとか両手が僅かに動くだけ。立ち上がるなど不可能だと身体が訴えかけてくる。

「……た、立たないと……戦わないと、ホワイトブレス……うう……でも、身体が……どうしてえ……」

そう、それはホワイトハートも同様であり、立って戦わなければと思ってもどうしようもない現実がそこにあった。

圧倒的な力の差。自分達の攻撃が効いているのであればあんな反撃はされなかっただろう。

全力の一撃を当ててもダメージはなく、逆に見えすらしなかったラネクの攻撃に、もう全身が満足に動かない。

勝てない。そう意識させるに十分な短い時間。ホワイトブレスの身体が小刻みに震える。

「……いえ、でも私達が立たないと……」

（ラネクを倒さないと、あの人が……皆が……）

泣き言は言ってられない。いかに漆黒の絶望が白きヒロインを染めようとも、命ある限り戦わなければ。

愛する夫の顔を思い浮かべ、自身を奮起させて四肢に懸命に力を込める。聖気を解放して、昔の姿に戻ったのにこんなことではいけない。

人々が見ている。立ち上がり、戦わなければ。悲鳴をあげる身体を無視して、希望を背に地に伏せる身体を起こそうとするホワイトブレス。

「……ぜ、絶対に、勝つんだからあ……んうう……!!」

それはホワイトハートも同様であり、戦う意志はまだ残っている。幼い守護聖女よりも成長した身体に鞭を打ち、声を張って、戦う姿を見せなければとうつ伏せになり地面に手を置いた。

「キシキシシッ!!」

しかし、彼女達の耳に届いたのは上から降り注ぐようなラネクの笑い声。

ズグウウツ!!

「んおおおおおおおおおおおおっ!!」

守護天女の口から飛び出たのは、あまりにも無様な声。それは痛み以上に快感を伴った、

下品な悲鳴。

うつ伏せのままのホワイトハート。立ち上がらんと震える身体の、下着に隠された淫裂へと目掛けてラネクの蹴りが突き刺さったのだ。

急所。媚毒に侵された身体にとっては痛みを容易く快感が上回り、アクメを迎えた守護天女はぷしゃつと下着を淫液で濡らす。

「は、ハートツ!? ら、ラネク……貴方……!!」

先の一撃は痛みが優先されるほどの威力だったが為に、快感が薄かった。しかし、ホワイトハートを襲った今のは違う。

間違いなく、改めて快感を刻み込むのを優先としたモノ。愛娘の惨めな声に怒りを覚えるホワイトブレス。だが――

ズウンッ!!

「なっ――ほごおおおおおおおっ!!」

足蹴にされて強引に仰向けにされたかと思えば、そのまま股間が力強く踏みつけられた。瞬時に走る痛み。しかしそれも消え去り強大な快感刺激だけが幼聖女を支配する。

ガクガクと全身を痙攣させ、無様なアへ顔を見せながら守護天女同様に絶頂して潮を噴くホワイトブレス。

「遊びにもならないな。こんな雑魚ヒロインが俺に逆らおうなんて、しっかりと立場をわからせてやろう」

今まで見たこともない正義のヒロインの敗北の姿。そして淫らな声をあげての絶頂。一体何が起こっているのか理解しきれない人々の前で、ホワイトブレスはラネクによって銀色の髪を掴まれた。

「あぐうう……た、立場なんて……わ、私達は、絶対に貴方に負けたり……なんて……」
強引に若い人妻ヒロインの身体が持ち上げられる。快感の波はまだ落ち着かず、甘い吐息を漏らしながらも懸命に睨みつけるホワイトブレス。

だが、その言葉にあの日ほどの力強さは感じられなかった。

「前にそいつは聞いた。今日で二度目の敗北だ。もうわかってるんだろう？ 聖気を吸収した俺には勝てないって」

「そ、そんなわけ、ありません……わ、私とホワイトハートがいる限り……絶対に……」
諦めない。そう言いたかった。だが、ラネクの言葉を強く否定できるほど、希望を抱くことができない。

守護天女も先の股間への一撃にビクビクと弱々しく震え、まだ満足に動くことができていないようだ。

前回とは違う。完全な実力差をわからされた上でのこの状況。歳を重ねたホワイトブレスは、冷静に現状を理解してしまう。

「キシキシッ!! お前もガキじゃないんだ、絶対に勝てないことくらいわかっているだろうに。いいだろう、ならば素直にさせてやるとするか」

「ま、また犯すつもりですか……無駄です。貴方みたいな怪人に犯されたとしても私は……」

「同じようなことしか言わねえな。だがいつまで強がれるか……それも楽しみだ」
犯すという事実は変わらない。前と同じように怪人の巨大な肉棒で。

そう思った時、ドクンと守護聖女の身体の奥底で何かが大きく高鳴った気がした。

「守護聖女ホワイトブレス。今日はお前を堕とすまで犯しきると決めていたからな。ホワイトハートの方はあいつらでいいだろう」

「なっ……あ、あれは……」

ホワイトブレスが倒れるホワイトハートに目をやると、そこにはラネクに似た姿の三体の怪人。

「『キシキシキシッ』」

「きゃあああああっ!! い、いやあ……!! は、放してっ……!! ほ、ホワイトブレス、

助けて……ホワイトブレスう……!!」

自由の利かない身体では振りほどくこともできず、ホワイトハートは群がる蜘蛛怪人に押さえつけられてしまっていた。

「あの日にホワイトハートが産んだガキ共の一部だ。自分のガキに犯されるなんて最高だろう?」

「あ、貴方は……なんて最低なことを……は、ハートっ!! 頑張つて……!! 絶対に私が助けてみせるから……!!」

娘が再び犯される。しかも相手はあの日に出産した子供。

最低最悪の状況に対してラネクへの怒りが募るばかり。しかし今はと、ホワイトブレスはホワイトハートを少しでも安心させんと叫ぶ。

「キシキシッ!! 無駄なことを。自分の心配をしたらどうだ? 今から俺のチンポに敗北するんだからなア」

「……くうう、こんな格好で……」

幼いホワイトブレスはラネクの手で四つん這いの姿を強要された。

ボロボロのコスチューム。桃色のスカートの下のレオタードはずらされ、小ぶりの尻の下でトロトロの秘裂が剥き出しとなっている。

（……わ、私、またラネクに犯されてしまうのね……この姿で……あんな、大きなモノを挿入^いれられたら……）

無力な自分への悔しさはある。だというのに、今から犯されることに対して身体が熱く燃えるようだ。

大人の姿ではなく過去の幼い状態で、ラネクの人間とはかけ離れた巨大な肉槍に貫かれたらどうなってしまうのか。

恐怖よりも優先されるのは期待。否定したくとも、この身体の疼きだけはとめられない。昨夜の夫とのセックスを経験してしまったが為か、余計にラネクの肉棒が雄々しく見える。

「かつて組織を滅ぼしたホワイトブレスの姿で犯せるとはな。さア俺のチンポで存分にイクといいッ!!」

ズブズブウッ!!

「んほおおおおおおおおっ!？」

幼い割れ目が一気に押し拡げられ、ラネクの巨大肉竿が守護聖女の膣を瞬時に支配する。ボゴオつと下腹部が肉棒の形に押し上げられ、子宮口がグニユうと押し潰される感覚。膣壁がゴリゴリと擦られ、膣内のすべてでラネクの怒張を感じ、ホワイトブレスの脳内は

快感によるスパークを起こした。

「キシキシッ!! 挿^い入れただけでいったようだなア!! ギチギチと締めつけて放そうとしないとは……このチンポ好きの人妻ロリヒロインがッ!!」

ぐっちゅ!! ずぶぶう!! どじゅうう!!

「んおおおお!! こ、こんなあ……んおお、ほおおっおお!! お、おちんちん、凄すぎてええ……!! おおっほ!! おおお!! んほおお!!」

（な、なにこれえ……あの日と全然違う……今の姿だから、おちんちんでいっぱいになってるう……で、でも、それでも……こんな、快感……身体、悦んじやってるう……!!）慣らすことなど考えていない強引なピストン運動。四つん這いというまるで獣のような姿で、尻肉が震えるほどの勢いで腰が打ちつけられる。

その度に銀髪の幼人妻ヒロインの身体は揺さぶられ、露出する乳房が僅かにぶるぶると揺れた。

ホワイトブレスに叩きつけられるのは圧倒的な快感の二文字のみ。たとえば姿が変わっても、この巨大な肉棒に貫かれれば味わわされる肉悦は同じ。

人々が見ているのだとわかっていても、もう獣のような喘ぎ声を抑えることなどできない。

極上の雄を知ってしまった身体は、約一カ月のお預けをされ、更には中途半端な肉棒の悦楽を得てしまったが故に、この怪人の肉槍が堪らなく愛おしく感じられる。

「突く度にイキやがって。戦闘でもセックスでも勝てないとはとんだ雑魚の変態ヒロインだなホワイトブレス!!」

「ほおっおお!! ち、ちがあ……私は、そんな……んおお、おお、おおおっ!! お、おちんちん、おちんちんぶつけないでええっ!! お、おしりの穴あつ!! おおおっほおおお!!」

幼い少女が出すとは思えない下品な嬌声。否定の言葉を出したくても、肉棒が膣壁を擦り子宮を叩く度に脳天にまで快感の電流が流れるのだ。更には尻を掴むラネクの手、その太い親指が小さな尻の肉穴へと突っ込まれ、グウッと捻げられる。

一度のピストンで必ず一度は絶頂を迎え潮を噴くホワイトブレス。かつてディストピアを滅ぼした伝説の姿で、その怪人に無様に犯されている現実。

かつての自分さえ穢されているのだという現実は、本来であれば惨めさに泣くところだが、今のホワイトブレスは違った。

媚毒に侵されているせいか、何もかもが興奮の材料として快感に変わり、アクメを繰り返すだけ。



「もつと鳴け!! 正義のヒロインが出すとは思えないアへ声を出せ!!」

パアンツ!! ぎゅむうう!! びゅるるるううう!!

「んほおおおおおおおつ!! お、お尻に、母乳までええ……!! か、身体、おかしくなるう……!! んおおおお!! おおほおおおつ!!」

肉棒の速度は変わらないまま、ラネクの手が一気に振り下ろされて尻肉が叩かれた。乾いた音が響き小さな白い尻が赤く染まる。

それだけですら絶頂から逃れられないほどの激感だというのに、更に二本の手が幼くも膨らんだ乳房へと伸びて乱暴に揉み始めた。

あの日以降母乳の出る身体のままの白き聖女は、盛大に母乳を噴出させ、まるで男の射精のような悦感に襲われる。

(……ああ……だ、ダメなのに……この快感がよすぎるのお……こ、こんな、乱暴なだけのセックスなのに……私、満たされていつてる……)

最初に犯され出産までさせられたあの日とは違う。初めて受けた快感の数々ではなく、改めて味わわされるモノはより輝いて、濃密に感じられるのだ。

夫とのセックスで満たされていた日々。今受けているのは、その肉悦とは天と地ほどの差がある。

愛など微塵みじんもない自分よがりの、欲望だけを発散する行為だというのに、この肉体が堪
らなく悦んでいるのが否定できない。

それが媚毒のせいなのだと理解していても、抗うことのできない、理性も吹き飛ぶほど
の激感を前にして何ができるだろうか。

「このままザーメンぶち込んでやる!! その身体でも孕めホワイトブレスッ!!」

「んほおおお!! ま、またあ……この、身体でも、孕むなんてええ……んおお!! おおつ
おお!! はひっ!! んう、おおおお!!」

過去の記憶すらも穢さんとするラネクの射精宣言に対して、身体は膣を締めて返す。そ
れはまるで怪人の精液を求め、孕むことを望むように。

(し、子宮に精液……ラネクの……怪人の精液をたっぷり射精だされちゃったら……私は……
…私はあ……)

子宮がきゅんきゅんと疼くのを確かに感じる守護聖女。間違いなく、昨日射精して貰っ
た夫のよりも凄まじいモノだろう。

それを想像しただけでどうしようもなく全身が欲してしまふ。身も心も白濁に呑み込ま
れたいと、怪人の欲望を。

ぶびゅうううううううう!! びゅぶりゆりゆりゆりううううう!!

「んほおおおおおおおおおおおつ!! ら、ラネクの精液でイクっ……!! また孕んでイクうううううううううつ!!」

（あ、熱い熱い熱い!!! こ、こんなどろどろで、熱くて、精液凄いいのおお!!
こんなの、絶対に孕んじやつてるう……）

嫌がる素振りを見せずに、盛大に吐き出された白濁粘液による圧倒的な肉悦を享受して絶頂するホワイトブレス。

下腹部が肉棒の形とは別に大量の精液によって膨らみ始め、その人外の精液に雌としての本能が魅了される。

昨夜の夫との違いを嫌でも教え込まれ、抱かなければいけない嫌悪感がまったくなく、ことに疑問すら浮かばない。

ガクンと弓なりに背を反らし、蕩けきった正義のヒロイン失格のアへ顔を見せる。

幼くも雄を教え込まれ、雌となった表情。それは人々に守護聖女の終わりを告げるには十分すぎるモノだった。

「キシキシッ!! あのホワイトブレスがこのザマだ。さあもっと人間共に見て貰おうじゃないか」

「んおおお……ひあああつ」

濃密な絶頂によってボヤける守護聖女の意識。そんな余韻など関係ないと、幼いホワイトブレスの小さな身体は、あの日のホワイトハートのようにM字開脚状態で持ち上げられた。

精液だけで膨らみを見せる下腹部。巨大な肉棒がズッポリと埋まる結合部。そして母乳を垂らす乳房と、正義のヒロインの痴態のすべてが人々に曝け出される。

「あああ……み、見ないで、見ないでください……」

「母娘らしくホワイトハートのように犯してやろう」

怪人が見せる最低の優しさ。快感に満たされても、まだ正義のヒロインとしての矜持きやうじは捨ててはいない。

だからこそ、こうして人々の前に晒されることには抵抗を示し、ホワイトブレスは顔を背けた。

このまま幼い姿での第二ラウンドが始まるかという時。

「ああああ……身体、戻って……」

ホワイトブレスの身体が光を纏ったかと思えば、次の瞬間にはその輝きはまるで過去の栄光のように消え去った。

残るのはコスチュームはボロボロのまま、たぷんと剥き出しの爆乳を弾ませ、肉づきの

よい身体を持った、おっとりとした美貌の人妻としての守護聖女の姿。

解放した聖気は消え、最早戦闘でもラネクに一矢報いることすら不可能となった証。

人の妻であるむっちりとした身体のまま放尿ポーズを取らされる恥辱。だが、もう人妻聖女に抵抗する力など残っているはずもない。

「もうあの姿は終わりか。だがそうしなければなおのこと俺に勝つのは不可能だな。キシキシッ!!」

「……ううう……」

（……もう、どうすることもできない……何もできずに叩きのめされて、犯されたのに悦んで……もう、何も言い返すことも……）

ラネクの高笑いに対して俯うつむいて涙を流すだけの守護聖女。戦いでも完全に敗北し、陵辱されているのに身も心も抵抗できずに悦ぶだけ。

助けると言ったホワイトハートをチラと見れば、蜘蛛怪人達に口も膺も尻穴も犯されている。

（ごめんなさい心……貴女を助けることもできない……弱いお母さんを許して……）

元の身体に戻ったことで完全な敗北感が守護聖女の心を闇に染め、戦う意志を、正義の心をも黒く塗り潰す。

そんなホワイトブレスにとってただ一つハッキリしていること。それはラネクの肉棒の感触だけ。

「せっかくだ。この身体のまま犯してやろうか」

ずっぐ!! どっじゅう!! ずぶぶ、ぐぶぐう!!

「んおおおおおっ!! お、おちんちん、刺さるうう!! んおおお!! おおおっおお!! さ、さつきより、凄いいい!! んほおお!! ああっひ、はひいうう!!」

むっちりとした肉体の人妻ヒロインに対してラネクが再びピストン運動を開始すると、たぷんたぷんと豊かな乳肉が弾み、艶の乗ったアへ声が響く。

（だ、ダメっ……この身体だと、余計にラネクのおちんちんが感じられてえ……こ、こんなに、大きくてえ……太くて、ごっごっぶつかるのお……!!）

この年齢でこんな恥辱のポーズをというよりも、昨夜の夫とのセックスを強制的に思い出させられていた。

長さも、太さも、熱さも、何もかもがラネクの怪人肉棒によって上書きされていく。子宮口が潰れんばかりの勢いで叩きつけられ、きゅんきゅんと歓喜に疼く子宮。

媚毒に侵されている状況は同じでも、この身の悦び、満たされていく感覚はラネクだけ。そう、ホワイトブレスの求める刺激のすべてを、この怪人は与えてくれる。

「やはりホワイトブレスはこっちの方がいいな。この無駄に育った乳や肉。犯し甲斐のある身体だぞ」

「おおおっ!! んおおお!! おおほっおおお!! ぽ、母乳、搾りながら……突かれる、とおお……!! あはへええ、はひっいい!! おお、おおっおお、ほおおおお!!」
(……あ、あなたあ……私、おかしくなってる……だ、大好き、愛してる……愛してるのお……)

両の乳肉が根元から搾られ、母乳が一気に噴出する。当然、腰の律動は変わらずに膣壁を擦り、何度も下腹部を肉棒の形に押し上げ続けた。

終わらない絶頂。刻まれる快感が大きくなればなるだけ身体が悦び、心が満たされていくように思える。

ラネクの馬鹿にしたような言葉でも、何故か身体が熱くなるのを感じた。それは愛する夫への裏切りも同然であり、まるで縋るように、忘れないようにとするように心の中で愛を訴える人妻聖女。

「旦那と比べてどうだ? まあ比べるまでもなく俺の方が優れているだろうがな。キシシシッ!!」

「はへえああっ!! んおお!! おおっほお!! そ、そんな、ことおお……おおおおっお

お!？」

（た、確かにラネクの方が凄いいけど……違う、違うの……か、身体がどうこうなんて、そんなこと……私は、あの人を愛して……）

そうだ。怪人なのだから当たり前。比べるなど卑怯にもほどがある。

それを理解していても、快感を求める身体に相應しい相手となればどちらかなど考えるまでもない。

だが違う。自分は夫を愛している。身体を満足させてくれる相手が好きなどと、そんなこと夫への裏切りであり、それではまるで快感を求めるだけの雌だ。

人々に聞かれることなど忘れたように押し出される下品な嬌声。人妻聖女は愛する夫の顔を思い浮かべるも、一突きされる度に脳内が真っ白になり、段々と薄れていくように思えてしまう。

「このまま完全に孕ませてやろう!! 守護聖女ホワイトブレス。昔も今も、その子宮に俺のザーメンを受けるがいい!!」

ぶびゅううううううう!! びゅぶりゅりゅりゅりゅうううう!!

「んほおおおおおおお!! ま、また精液いい!! い、イクイクイクうううううう!!」

ズンッと深くまで肉棒が突き刺さり子宮口にぶつかった直後に、爆発するように白濁液が噴出する。

先の幼少時の姿の時以上に、膣内から子宮へと注ぎ込まれる怪人精液の快感を大きく感じた。

（ま、また孕む……ラネクの赤ちゃん孕んじやうう……!! あ、あなた……あなたああ……!!）

逃れられない受精。爆発する白濁の悦感によって守護聖女ホワイトブレスの脳内から愛する夫を消し飛ばし、真っ白に染め上げる。

蕩けきったアへ顔を見せたまま人妻聖女はビクビクと痙攣し、結合部からごぶつと汚辱液が溢れて零れ落ちた。

「今度はこのケツマンコを犯してやろう。俺のザーメンがどれだけ注がれたか、しっかりと人間共に見せながらな」

「あはへええ……んおおおっ!? お、お尻に、挿入^はいつてくるうう!! ほおおおおおおおおっ!!」

人妻聖女の淫裂から引き抜かれたラネクの肉棒。二人分の淫らな液体によってぬらぬらと光る怒張が今度は、無防備な排泄孔へと突き入れられた。

挿入の為に存在してはいない肉穴が一気に占領されていく感覚に、守護聖女は嫌悪を一切抱くことなく、背徳的な変態快感として受け入れる。

（……あ、あの時だけしか犯されてないのに……お尻の穴なのに、どうしてこんなに気持ちいいのお……!!）

ズウンつと直腸の奥深くまで挿入される怪人の肉槍に対して、ホワイトブレスは高らかに下品なアへ声をあげて変態的な絶頂を迎えた。

夫とは一度もしたことの無いアナルセックス。そもそもとしてやろうという意見すら出たこともない。

あの日ラネクに調教された時に強引に犯されてそのまま。最初は戸惑いと嫌悪があったというのに、今はむしろ悦びだけ。

「ここは旦那にもさせたことはないんだったよなア。キシキシッ!! それがもうケツ穴に挿^い入ただけでイクようになって。この変態人妻ヒロインめッ!!」

パンパンパンッ!!

「んおっおお!! おおっほおお!! おおっ、あはひい!! ふうああ、ひいいう!! お、お尻捲れてええ……ああ……お、オマンコ、拡げないでえ……ほおおっおお!!」

ラネクのピストンに合わせて尻肉が波打ち、銀髪人妻ヒロインの口から下品な穴に相應

しい声が押し出される。

身動き一つできない守護聖女は犯されながら、多数あるラネクの手によつて先ほどまで犯されていた秘裂を大きく拡げられ、流し込まれた白濁液がとろとろと零れ落ちる様を見せつける状態に。

（こ、こんなことで感じるなんて……これもラネクの毒のせい……でも、もう今の身体じや……私のことを満足させてくれるのは……）

恥ずかしい。死んでしまいたい。負の感情に襲われる人妻ヒロイン。

最早媚毒を浄化することもできず、排泄孔で感じてしまうのも戻すことはできない。そもそもとしてラネクに勝てない以上、そんな心配すらも無用。

だがもし、もしも見逃されたとしても、もう夫の人間サイズのモノでは満足することはできないだろう。いや、そもそもとしてアナルを犯して欲しいと願うことすらできない。

ラネクに力で圧倒され、雌として犯されて、ホワイトブレスの正義の心が肉の悦びに侵食されていく。

「キシキシッ!! ケツ穴犯されて気持ちいいんだろう!! もうお前は俺のチンポでなければ満足できない雌だ!! ホワイトハートを見てみる。随分と気持ちよさそうじゃないか」
「んおおおっ!! ほおおお!! お、お尻いつ……お尻の、穴あ……!! んおおおっほ!!

ら、ラネクの、おちん、ちんがああ……はひいい!! おおおっ!! は、ハートお……」

認めたくないという僅かな理性すらも破壊せんとする乱暴な腰の動き。大きく広げられた膣孔からたつぷりと注がれた孕ませ汁が、搾られた母乳と同様に宙を舞った。

何をされても意識が飛びそうな悦感として人妻聖女の脳を揺さぶる。それは間違いなく、夫との営みでは一度も与えられなかったモノであり、今後も与えて貰うことはないだろう。人間と怪人の差を己の肉体で刻まれるホワイトブレス。鼓膜を震わせるラネクの言葉に、近くで襲われている守護天女へと意識が向けられる。

いや、ラネクが勝手に移動することで、その衝撃にアクメを繰り返しながらも無理やり、にその姿をまざまざと見せつけられることに。

※

ホワイトブレスがラネクに犯され始めた時。ホワイトハートもまた雌として扱われていた。

「『キシキシシッ!!』」

「や、やだっ……やめてっ!! ひっ!」

(……か、勝てない……今のわたしじゃ……こいつらにも勝てない……やだ、こんなあ……)

ホワイトブレスに助けるからと言われても、蜘蛛怪人三体の動きがとまるわけではない。逃げることもできないダメージ。更には守護聖女と同じように、ラネクの異常なまでの力によって叩きのめされたことで、強い敗北感が刻みつけられていた。だからこそ、母の助けるという言葉も気休めでしかないと、幼いホワイトハートにもそう思えてしまう。

そんな守護天女の眼前に三本の怪人肉棒が向けられた。

「や、やめ、て……そんな、ちんぽ……み、見せない、でえ……ひやうう!! んんう……ぐりぐり、しないでえ……」

抵抗できない守護天女の両頬と口へと、蜘蛛怪人の凶悪な怒張が擦りつけられた。

熱く、長く、巨大な肉棒。雄の象徴でもあり、そのあまりの力強さにホワイトハートの雌が強制的に呼び起こされる。

(……ああ……このちんぽ、ラネクのようにビクビクしてる……それに、臭いも凄くて、頭ぼーつとしちゃう……)

それはあの時から今日まで、守護天女が求めていたモノに他ならない。

昨夜の自慰とは到底比べられない、怪人の巨竿。それが三本も目の前にあり、ホワイトハートを犯そうとする絶対的な欲望を感じる。

「んんんつぶ!! んじゅっ!! じゅぶ、ぐつぶぢゅぶ!! んぶぶっ!! ぶづじゅう!!」
（あああ……わ、わたしの口の中にちんぽがはいつてきてるう……でも、これおいしい
……身体が勝手に動いちゃうよお……）

口に押しつけられていた肉棒が、弱々しく開きかけたのを見つけてか一気に口腔内へと侵入してきた。

嗅覚を麻痺させるような雄臭さが口いっぱいに広がり、擦られる舌からも雄の欲望の味が濃く感じられてしまう。

いかにまだ幼い少女だとしても、過去の調教により完全に雌として目覚めさせられたことで、お預けを喰らい続けていた身体はもう抑えることはできなかった。

餌に貪りつく獣のように、突き入れられた肉棒へ下品な音を立て始める。

食べ物でもないのに美味しいと感じ、雄の味を求めて更なる刺激を送るが、それ以上にぐぼぐぼと蜘蛛怪人のピストンによる口内摩擦だけで、ビリビリとした快感が守護天女を襲い続けた。

「んぐつぶ!! じゅつぶ、ぢゅぶおお!! ぐぶっじゅ、ぢゅぐぶうう!! んんんんううっ!!」

（ち、ちんぽで……口まんこ擦られてるだけでイッチャウウウウっ!!）

ビクビクと、まだ相手が射精までしていないにもかかわらずアクメを迎える桃色髪の変身ヒロイン。

ラネクに教え込まれた淫語そのままに、口腔を責められ、奉仕した事実を認めて守護天女は口だけで絶頂したのだ。

ずぶぶぶうう!!

「んんんぶうう!! んんんんんんんっ!!」

(あああああああつ!! ちんぽ、おまんこにはいつてええ……イクうううううううっ!!)

ふと身体を持ち上げられたかと思えば、仰向けに横たわるもう一体の蜘蛛怪人のそそり立つ怒張へ目掛けて下ろされた。

とろとろに濡れる膣が怪人の肉槍によって一気に貫かれ、肉壁にくへきがごりゅごりゅと擦られる。

下腹部がボゴッと膨らむほどの巨竿。子宮口にぶつかった衝撃で守護天女の視界が明滅し、一瞬で絶頂へと押し上げられた。

(あああ……こ、これえ……これが、欲しかったのお……ちんぽ、ちんぽお……)

それは守護天女が何よりも欲していた快感だった。媚毒に侵され、昨夜に至っては自慰

までして求めた肉の悦び。

ラネクとの力の差を教え込まれ敗北感に満たされていく中で快感刺激に抵抗できない今、これを受けてしまえばもう守護天女の正義の心は雌の悦びに溶かされる。

「んぐぶっ!!　じゅぶっ!!　じゅぶぐ、ぢゅぶりゅりゅっ!!」

(……ゆ、指なんかとは全然違うう……お、奥まで、ごりゅってきてるのお……か、怪人のなのに、これ、おまんこ悦んでるのお……!!)

蜘蛛怪人のモノなのだと理解していても、そんなこと構うものかと、アレだけ欲していた快感をもっと寄越せと身体が、本能が訴えかける。

なまじ今日まで中途半端な快感だけを得ていたせいもあり、その反動で欲望の火がついた肉体はもうどうしようもなく求めてしまうのだ。

きゅんきゅんと疼く下腹部。一カ月前までは何も知らなかったのに、今では性を求めるケダモノに近い。

念願の肉棒快感を得た守護天女。しかしまだ始まってすらない。まだ少女が産んだ蜘蛛怪人はここにはもう一体存在している。

ずぐぐうううっ!!

「んむうううううううっ!!」

（け、けつ穴あつ!! けつまんこお……い、いいいつ!! 全部イクつ!! わたし、全部のちんぽでイっちゃうよおおおつ!!）

蜘蛛怪人に跨る形で膣孔に肉棒を受け入れていた守護天女。僅かに前傾姿勢を強要され、聖気によって成長したむっちりとしたヒップがより見えるようになる。

白桃を思わせる瑞々しい肌。スカートをぺろんと捲り上げられた先にある極上の果実の割れ目の先に、魅惑の肉穴。

そこへと目掛けて最後の一本が勢いよく突き入れられた。排泄孔が怒張の形に押し拡げられ、本来とは別の形で逆流してくる感覚に陥る。

だがそれすらも気持ちいいとしか思えない。尻穴であるとかわかってるからこそ、被虐の恍惚がマゾ雌として調教された身体を悦ばせるのだ。

「んうつぶ!! じゅぶぶつ!! ぐぶつうう!! んぶりゅ、んぶうおおつ!! おおおつぽお!!」

（く、口まんこも、けつまんこも、おまんこも……滅茶苦茶にされちゃってるう……!! ご、ごめんなさい、お母さん……わたし、イクの……大好きになってるよお……ちんぽでイクの、とめられないのお……）

完全なる敗北に正義の炎が小さくなったところで、快感の嵐によって吹き飛ばされた。

幼いからこそその希望を信じるということすらできなくなり、何も知らなかったからこそスポンジのように吸収する守護天女は、雌の悦びを覚えて深く堕ち始める。

まだ一度も射精されていないというのに、こんなにも容易く肉悦に抗えなくなっているのは前回の調教があったからこそであり、長い時間を置いたから。

何もかもラネクの策略のまま進み、守護天女は思考も満足に定まらない状態でひたすらに三本の肉棒への奉仕を続ける。

「んんっぐ!! んぶうつ!! ぐつぶじゅっぐ!! んぶおお!! おおっぼ、じゅぽおおお!!」

（ち、ちんぽがなかでごりゅごりゅきてるうう!! ち、ちんぽいっぱい……いい!! もっと、もっとぐちゃぐちゃにしてええ……!!）

膣孔と尻穴で暴れる怒張が体内でぶつかり合うかの如く押し合い、二重の刺激となって守護天女の肉体を壊さんとする。

中から弾け飛ぶのではと思わせる激感に対しても、望むのは更なる衝撃のみ。

桃色のポニーテールが尻尾のように揺れ、たわわに実る乳房もまた悩ましく弾む。

蜘蛛怪人に囲まれている為に、ホワイトブレスのように人々の目に晒されることはないが、その分三体分の責めを受け続ける白き天女。

母親がどうなっているのかもわからないまま、ビクビクと脈動する肉棒を自分自身も震えながら^{くわ}啞え込む。

「『キシキシッ!!』」

三体の蜘蛛怪人が同時に声を出し、ホワイトハートは自身を犯す三本の肉棒が激しく震えるのを感じた。

それを射精の合図なのだと理解するよりも早く、もう蜘蛛怪人達は欲望の限界を迎える。びゅぶりゅううううううう!! びゅぶぶぶりゅりゅりゅ!! ぶびゅうううううううう!!

「んんんんんんんんんううっ!!」

（んあああああああああ!! ざ、ざーめんが、一気にびゅりゅびゅりゅってきてるうう!! あ、熱い熱いあついいいい!! イクイク、イっちゃうううううう!!）

口、膣、尻穴。すべての穴で同時に弾ける白濁粘液。まるで内部から守護天女を焼き尽くさんとする熱を帯びた欲望の汁が、一気に白き天女の内部を白濁で埋め尽くす。

ボゴオつと一気に精液で膨らむ頬と下腹部。怪人特有の多量の精液を受けて、ホワイトハートの敏感な肉穴のすべてが歓喜に叫ぶ。

目の前が真っ白に染まり、思考もイクという絶頂に關することだけ。

(い、イクのとまらない……!!　ずっとイクう……!!　ちんぽで、ざーめんぐちゅぐちゅにされてえ……い、イクのとまらないのおおおつ!!)

白濁液が注がれようと蜘蛛怪人のピストン運動がとまることはなかった。射精しながらも腰は動き続け、唾液や淫液と混ざり合った白濁液が攪拌かくはんされ続ける。

内部で泡立っている光景が脳裏を過るも、そんな汚らしいものすらも興奮あおを煽る材料。

最早両親のことも人々のことも考える余裕はなく、ただただ目の前の快感を受け、求めるだけの正義のヒロイン。

「んんぶううっ……ぢゅずうう!!　んぐ、ごく、ごくっ……んんう、ぷああっ……えほっ、ごほっ……!!」

最後の一滴まで注がれ一度引き抜かれようとするのを、ホワイトハートは必死に吸いついて放そうとしなかった。

頬を窄すぼめる下品な顔も構わずに、特濃の怪人精液を喉に流し込みゴクンと鳴らす。

精液臭い息を吐き、軽くせき込むのは口を塞がれて呼吸も満足にできなかったから。

「んおおおおつ……ああ……ど、どうしてえ……ちんぽ、抜いちゃだめえ……」

次々に引き抜かれていく肉棒に対して、キュツと締めつけて抵抗するがそれも無駄。

三体の怪人が離れると、ぽっかりと開いた肉穴からごぼつと淫液が溢れて落ち、地面

を穢す。

まだ足りないと言った表情で自らが産み落とした怪人を見ると、割って入るようにしてラネクが現れた。

「……あ……ぶ、ブレス……」

ラネクに幼い子供の放尿ポーズで抱え上げられているホワイトブレスを見て、ホワイトハートの表情が固まる。

助けるからと言っていた母親ヒロイン。しかし、それも不可能であったのが現実として見せつけられているのだ。

「……ああ……ハートお……」

尻穴に肉棒で栓をされ、淫裂を拡げられたままの恥辱の姿を愛娘に見せつけられている。そしてホワイトハートもまた三つの穴から精液を零している、陵辱された姿。

お互いに惨めな様を見せ合う状態の中、まるで沈黙を破らんとラネクの肉棒から白濁液が直腸内で弾ける。

ぶびゅううううううう!! ぶびゅりゅりゅりゅりゅううう!!

「んほおおおおおおおつ!! お、お尻につ、精液いい……!! は、ハートの前なのに、イクうう!! おほおおおおおつ!!」

たとえ家族が前にいたとしても関係ない。巨大な快感の前では意味を成なさないのだと証明するようにして、人妻聖女は尻穴射精を受けて耐えようともせずにアクメを迎えた。

ぷしゃあつと守護天女にかからんとする勢いで潮がまき散らされ、まるで地面は穢れたシャワーを受けたように汚く変色する。

とても正義のヒロインとは思えない無様なアへ顔を尻穴射精で強制されるホワイトブレス。そこには、前のように必死に耐えようとする意志は感じられない。

「ほおおっおおおお!! ひゃぐつ……ううう……お、お尻、熱いのお……ああ……はへええ……」

射精の途中で無理やりに引き抜かれる身体。巨大なモノを排泄したかのような感覚に再び絶頂し、ビクビクと痙攣したままビチャつと穢れた地面へと落とされる人妻聖女。

むっちりとした尻を高く突き上げた惨めな姿。肉棒の形に拡がった排泄孔へと目掛け、続く射精が降り注いだ。

人妻の熟れた尻果実に雄の欲望に塗れたシロップがかかり、熱くデコレーションされる。「キシキシッ!! 二人ともいい姿になったじゃないか」

そんな二人を見下ろすラネクが笑う。一度陵辱を終えたのならば何か意味がある。そう思えても、今の母娘ヒロインにはラネクの言葉を聞く以外はできない。

「さて、じゃあ聞いてみるとするか。この俺に敗北したことを認めるかどうかをな」

前回に比べて圧倒的に短い時間で問われる質問。出産までさせられても抗った二人のヒロインを相手に早すぎるとも思えるが、すぐに出なければいけない反論はなかった。

ホワイトブレスとホワイトハート。互いに立つことも敵わない、汚辱液を垂らすだけの犯された母娘ヒロインが、弱々しい表情のまま互いに見合う。

全力を出し、二対一にもかかわらず手も足も出ずに叩きのめされ、雌として犯されたにもかかわらずに抗うこともできず、身体が悦びだけを得てしまっていた。

愛する夫。大好きな父親。その顔を思い浮かべようとしても、ラネクや蜘蛛怪人の顔や肉棒によってすぐに上書きされてしまう。

今の自分達がどういう存在で、何を求めているか。それを十分すぎるほどに理解させられた母娘ヒロイン。

お互いに励まし合えばまだ戦う気力も湧いてきただろう。だが、それを言い逆らったところでどうなるというのだろうか。

ラネクの気紛れで見逃されたとしても、また同じことを繰り返すだけ。求めるモノを得られずに毎日^{まぐ}を過ごし、現れるラネクに敗北する。

勝利のイメージすら浮かんでこない二人のヒロインに、戦う為の言葉など出ようはずも

ない。

だとすれば出てくる言葉の方向性は決まっているようなものだった。

(……ごめんなさい……あなた、心……)

心の中とする謝罪。それは正義の為に戦ってきた今まで、愛する家族と暮らしてきた今まで、それらと別れを告げる為のモノ。

「……わ、私……守護聖女ホワイトブレスは……ら、ラネク様に、敗北しました……」

尻を突き出したポーズからよろよろとラネクへと顔を向け、そのまま汚辱液に穢れた地面へと額をつける。

正義のヒロインが絶対にしてはいけない、服従の土下座。ボロボロのコスチュームに淫液を垂らす肉穴。

現状の何もかもが無様に敗北した変身ヒロインを現しており、弱々しく震える姿もまたかつての凛々しさを微塵も感じさせない。

「お、愚かにも、逆らっていた私をお許しください……せ、聖気を吸収する、ラネク様に……わ、私のような、歳を重ねただけの雑魚ヒロインが……勝てるはずも、なかったんです……」

口にしてはいけない言葉が次々に出てくる。だが、もう後戻りはできない。

正義の心は悪の力で折られ、快感によって溶かされた。今の自分は変身ヒロインかもしれないが、そこに正義の二文字は相応しくない。

「……あ、あの姿でも叩きのめされてしまったら……も、もう、絶対に勝てません……守護聖女ホワイトブレスは……ディストピアに……いえ、ラネク様に……完全敗北、しました……!!」

（い、言っちゃった……もうおしまいなのね……でも、身体ゾクゾクしちゃう……私、こんなに変態だったなんて……いえ、変態にさせられたんだわ……）

人々にも聞こえるように最後は特に大きな声で敗北を認める人妻聖女。

最低な言葉を並べ立てているにもかかわらず、身体は熱くなるばかりで興奮がとまらない。

ラネクに調教されてしまったから。そうわかっていても、この身体の疼きはどうにもならない。

（さよなら……あなた、心……）

完全なる決別。横で呆然と見ている守護天女がどう思っているのか。少しだけ胸が痛む守護聖女の耳に届いたのは――

「わ、わたしもっ……守護天女ホワイトハートも……ラネク様に、負けました……」

ホワイトハートの敗北宣言だった。

ホワイトブレスと同様に地に額をつけての土下座をしながら、敵である蜘蛛怪人へと敗北を宣言する白き天女。

「ど、どんなに頑張っても……か、勝てる気がしないの……正義のヒロインなのに、だめなのに……もう、身体……動いてくれないの……」

事実と思い浮かんだ言葉をただ並べ立てるホワイトハート。

正義のヒロインとして戦わなければいけないのは、頭では理解しているが、もう身体が諦めてしまっている。

「……だから、わたしは……守護天女ホワイトハートは……ラネク様に、完全敗北しました……!! も、もう二度と、逆らったりしません……!!」

まるで悪さをした子供のようにふるふると震えながら、所々で丁寧な言葉を使う。

不器用ではあるが、それでも完全敗北を告げる言葉は真実。

そう、守護聖女と守護天女。平和を守ってきた白き正義のヒロインは今日、ここで悪に完全敗北をしたのだ。

「キシキシッ!! いいだろう。そこまで言うのであれば認めてやろう」

「ありがとうございます……!!」

「……あ、ありがとうございますっ!!」

勝者の余裕を見せつけるラネクに対して、ホワイトブレスもホワイトハートも歓喜の表情を見せた。

「では誓いのキスをこのチンポにして貰おうか。俺を喜ばせることを言いながら奉仕しろ肉便器ヒロイン共」

既に人間以下の扱いを決定したかのように言いながら、淫液に鈍く光りながらギンギンにそそり立つ怪人怒張を見せつけるラネク。

それに対して、敗北ヒロイン二人はまるで家畜のように四つ足で近づき、はあはあと荒く呼吸をしながらたらんと舌を垂らす。

そう、敗北を決定づけたのは実力よりも何よりも、この怪人の肉棒から送られる異常なまでの快感。自分達を屈服させた雄の象徴を前にして、白きヒロイン達は淫らに微笑んだ。「は、はい……あ、あの人よりも硬く、太く、長い……人妻ヒロインマンコを埋めてくれる、怪人チンポ様あ……ほ、ホワイトブレスは、このチンポにも屈服したことを、誓います……んちゅ、ちゅじゅ……れろれろおお……」

夫のことはまだ愛している。しかし、この肉棒は雌としての自分を完全に悦ばせてくれるのだ。

身体はもうこの巨根に屈服した。その事実は確定であり、ラネクの為にと自然に人間である夫と比べてしまう人妻ヒロイン。

ホワイトブレスは命令通り、誓いのキスのようにラネクの亀頭に唇を重ねたかと思えば、舌を這わせて熱い吐息を浴びせながらねちゃねちゃと舐め始める。

「……こ、このちんぽで……わたしの小さなおまんこお……ずこずこされちゃうの、大好きい……ま、またあの時みたいにな、ろりまんこ、メチャクチャにしてください……んんっ……れろぴちゃ……んんむう」

経験したのが全員怪人の肉棒であるホワイトハートにとっては、犯されるのを求めていることを淫らな雰囲気混ぜてラネクへと伝える。

まだ成長状態の為に幼いとは言えない姿のまま、ホワイトブレスの邪魔にならないように横にずれながらも、キスをし、母に倣うよう^{なら}にして舌を艶め^{なま}かしくくねらせた。

「んぢゅっ……ちゅじゅっ……ま、また……ラネク様のチンポ汁で、中古ヒロインマンコを……孕ませてください……人妻子宮が、きゅんきゅん疼いてとまらないんです……れろれろお……ぴちゅ、んぢゅ……!!」

「ああん……わたしも、ラネク様の怪人ざーめんで、ろりまんこ孕みたいのお……い、いくらでも射精していいから、ホワイトハートも孕ませてえ……んんっ……ちゅぱ、ちゅう

うう……ちんぽ、おいしいい……」

怪人の股間で、年齢差のある二人のヒロインが一本の肉棒を挟むようにして舌を躍らせている。

互いに肉づきのよいムッチリとした尻肉をゆらゆらと揺らす姿は、雄の欲望を掻き立てるに十分なモノ。

完全屈服を求めていたラネクからしても破壊力は抜群であり、蜘蛛怪人を見上げながら奉仕する敗北ヒロイン二人の姿に、早くも限界が訪れたようだ。

「キシキシッ!! あの凛々しいヒロインがこうも堕ちるとはな。お前達に相應しいザーメンパックをくれてやろう!!」

びゅぶううううううう!! びゅぶりゅりゅりゅううう!!

「んぶうあああああつ!! あああ……ら、ラネク様の、どろつどろチンポ汁うう!! ああああ……ひあああああああつ!!」

「ひやぶうつうううう!! ああああつ……あ、熱いのが、顔にいい……ひああああ!! ひやうううううう!!」

まるで火山の噴火を思わせる白濁液の噴出に、ほぼ密着していた母娘ヒロインはその顔面に濃厚な怪人精液の直撃を受けた。

求めていたモノを直接受けた喜びに、白き聖女と天女は白濁粘液のパックの下で表情を蕩かせ、絶頂に全身を震わせる。

大きく開いた口にも精液は入り込み、こくと喉を鳴らして大事に飲み込む二人。まるでライスシャワーを思わせ、ホワイトブレスは特に深く歓喜した。

「さて、母娘ヒロインが俺に屈服したとなれば……少し面白いことをしようか」

第五章 白き正義、完全屈服。別れ告げる肉穴ヒロイン

「んほおおおおつ!! おおおおつ!! ら、ラネク様のチンポおおつ!! ひ、人妻ヒロインマンコに、ずんずんきてますううつ!!」

白守早苗の夫であり、白守心の父親が目覚めると、とても正常な人間が出すとは思えない下品な嬌声が聞こえた。

うつ伏せに倒れていた身を起こすと、視界には白く美尻が上下に乱暴に弾んでいる。その主は蜘蛛の顔をした怪人へと両脚を絡ませながら、まるで愛する相手にするようにして深く抱きつき、膣孔へと挿入されている肉棒を貪っていた。

銀色の髪を振り乱しながら、一突きされる度に獣のような声をあげるのは、信じられないことだが守護聖女ホワイトブレス。

昔も今も活躍していたヒロインを知らぬ者はほとんどおらず、当然彼も知っている。

だが、何故こんなことになっているのかがわからなかった。

ホワイトブレスとホワイトハート。二人のヒロインが敗北したという情報が入り、近くだった為に妻と娘を探していた彼は、早苗から連絡を受けて待ち合わせ場所まで来たところ

ろで、蜘蛛の怪人に襲われて意識を失ったのだ。

そして起きれば何故かこんな場所でこんな光景が広がっている。混乱しない方が無理というモノだろう。

「あ、お父さん起きたみたい」

お父さん。そう呼ばれた彼が横を向くと、そこには敗北したという情報があつたホワイトハートの姿。

完全に元の年齢へと姿が戻った守護天女はボロボロのコスチュームに、精液でドロドロの身体。しかし何よりも目を惹いたのは、ポツコリと膨らんだ腹部。

臨月のそれを思わせる孕み腹を見て驚愕する白守早苗の夫。どうしてホワイトハートがお父さんなどと言ったのか。

答えはもう出ているというのに、脳がそれを否定しているようだった。

※

「お前のアへ声で旦那が起きたみたいだぞ。一旦終わりだ」

「……ああ……わ、わかりました……」

ラネクに言われ、敗北聖女は逆らうことなく蜘蛛怪人から離れる。その表情はどこまでも残念そうで、蕩けた瞳で今まで自分を犯してくれていた怪人の肉竿を見続けるホワイト

ブレス。

「どうしたのあなた。ああ、この姿じゃわからないかしら？」

振り向くとそこには夫が呆然とした表情を浮かべていた。

何もかもが理解できていないという顔を見て、くすりと淫靡^{いんぴ}な笑みを浮かべるホワイトブレス。

ホワイトハートと同じようにコスチュームは大破しており多くの肌が露出し、全身が精液臭くなっている。

そして当然、腹部はラネクの精液によって孕み、限界まで膨れたボテ腹状態。こんな姿では困惑しても仕方がないと、ラネクの横に立ったまま彼女は変身を解いた。光に包まれる肉体。時間にして一秒にも満たずに光が弾けた後に残るのは、白守早苗としての身体。

「今まで黙っていてごめんなさいあなた。守護聖女ホワイトブレスの正体は私、白守早苗なの」

家を出る時と同じ服装だが、精液に汚れる髪や肌、膨らんだ腹部は違う。今にも出産しそうなほどの孕み腹を両手で支える姿は、かつて心を産んだ時のよう。

「それでね。守護天女ホワイトハートも……わたし、白守心なんだ」

ラネクを中心として早苗とは逆の位置に立つホワイトハートの姿も、白守心へと戻った。まだ幼い身体。しかしそれに不釣り合いなボテ腹。早苗と同様に両手で支え、普段見せたことのない蕩けた表情を父親へと見せる心。

「私達、今日まで皆の為に……あなたの為に戦ってきたんだけど、ダメだったの。ラネク様に完全に敗北して、一匹の雌だったこと、教え込まれちゃった」

「うん……絶対に負けないって思ってたんだけど、無理だった……たくさんちんぽで犯されて、気持ちよくさせられちゃったの……たくさん、ラネク様の子供も産んだんだよ？」

上気し赤くなる二人の頬。言葉も甘く蕩け、嫌がる素振りを一瞬たりとも見せない。

すべてが幸福なのだと告げる妻と娘に対して、夫は何かを言いたげに口を開くばかりで続かない。

「それでね、ラネク様があなたにお別れをする機会をくれたのよ。だから、最後に私達の変態姿……目に焼きつけていってね。聖女・転身!!」

「ラネク様のちんぽに犯されて、出産するところ……お父さんだけ特別に間近で見えていいんだって。楽しんでいってね。天女・転身っ!!」

完全なる別れを見せる為に、再び変身する二人のヒロインだが、早苗は直前に左手薬指の結婚指輪を外した。

ホワイトブレスとホワイトハート。二人のコスチュームは先ほどとまったく同じ状態。聖気による浄化をわざとしなかったことで、ラネクの肉便器であり孕み穴である人間以下の存在だと認めているのだ。

「特等席でお前の妻と娘が俺に犯される姿を見るといい。そら、チンポを欲しいんだろ!!」

パアンツ!! バチインツ!!

「んほおおおおおつ!! も、申し訳ありませんっ……!! あ、あの人の前で……敗北人妻ヒロインマンコに、怪人デカチンポをぶち込んでくださいいっ!!」

「はひいいいいいっ!! ご、ごめんなさあいっ……!! お、お父さんの前でえ……敗北ろりヒロインまんこにい……ラネク様の孕ませちんぽ、ぶちこんでええ……!!」

同時に尻を叩かれた二人のヒロインは、まるで調教されたペットのように赤くなった尻肉を見せつけるように腰を振り、可能な限りの下品な淫語を口にしてラネクを求める。

「キシシシッ!! 馬鹿みたいにケツを振って、これがあのホワイトブレスとホワイトハートとはな。さて、じゃあまずはおつちからだ!!」

ずぶぶぶううっ!!

「んほおおおおおつ!! ら、ラネク様のチンポおおおつ!! し、子宮に、ずうんっ

てきてますうう!!」

人妻の豊満な尻と幼い小振りな尻。二つの果実を見せられたラネクが選んだのは、熟れ始めた桃果实。

先ほどまで犯していた続きと言わんばかりにガツチリと腰を掴み、荒々しく自身の腰を打ちつけ始める。

選んで貰った喜びと、巨大な肉棒に淫壁を擦られる悦感に、一瞬でアへ顔を見せる人妻聖女。

「あああ……ホワイトブレス……いいなあ。んおおおおっ!! け、けつ穴に、ラネク様の指があっ!! ひゃひううう!! んおお、ほおっおお!!」

選ばれずに残念がる白き天女にはラネクの腕が一本向けられ、その小さなアナルが貫かれた。

一気に数本の指を纏めてぬぼぬぼと乱暴に抜き差しされてしまえば、まるで肉棒で犯されているように思え、幼いヒロインは尻穴の悦楽に悶える。

「さあせつかく旦那が目の前にいるんだ。俺のチンポと比べてどうなのか言ってみろ!!」

「おおっほお!! おおおっおお!! は、はいいいつ!! あ、あなたあ……!! ら、ラネク様の、チンポはあ……んほお!! おおおお!! あ、あなたのより、全然っ……太いの

お!!」

夫を前にして敗北した相手に犯され、更にはその違いすら口にすることを強要される。しかし、やはり嫌悪感はなかった。逆に、ホワイトブレスは夫に見られることでゾクゾクとした興奮を覚え、より被虐の恍惚に満たされていく。

「あ、あなたのじゃ届かなかった……くふうう!! んほっおお!! し、子宮に、ごつんつてキスしてくれてえ……それだけで、私イっちゃううう!! おほひいいいい!! ああっああ、んほおおお!!」

夫とのセックスでは出したこともない下品な嬌声。蕩けきつただらしな表情。ゆっさゆっさとたっぷりとした乳肉が揺れ、孕み腹も大きく動く。

「だ、ダメだったのお……昨日の、あなたとのセックスう……おおお!! んんう、おお、ほおおっおお!! き、気持ちよかったけど、全然たりなくてえ……い、一回で終わりだなんて……」

媚毒に侵されていたが為に快感はあった。しかし、それは気持ちよかったただけであり求めている場所には到底届かない。

それを思い出しながら、人妻孕みヒロインは喘ぎながら言葉を紡ぎ続ける。

「で、でもラネク様は違う……ず、ずっと犯してくれて、孕むまでチンポ汁もくれる……」

んおおおお!! ああつ、んほおお!! こ、こんな凄いチンポで犯されたらあ……雌になっちゃう……!! せ、正義のヒロインなんて、絶対に勝てないのおおっ!!」

もう自分はただの雌。正義のヒロインとしても肉棒の前に敗北し、人間ですらないのだと宣言する敗北聖女。

「あ、あなたのこと、まだ愛してる……で、でもお……んおお!! おほおお!! ああつ、あひいい!! 愛だけじゃ、ダメえ……愛だけじゃ、もう満足できない……私を満たしてくれるのは、ラネク様の怪人チンポだけなのお……!! んおおおっ!! おおっほおお!!」
そう、雌になってしまった今、愛のあるセックスだけでは満たされない。いくら心が満たされても、身体はいつまでも渴いていく。

「……もう、元の生活には戻れない……あなたのチンポじゃ満足できない……ほおおお!! んおお、あはひいい!! だ、だから私、ラネク様に身も心も捧げてチンポ穴になるの……いえ、してください……私を、貴方の肉穴人妻ヒロインにしてください……!!」

「当然だ!! お前のような肉便器ヒロインは滅多にいないからな。俺が飽きるまでは犯し尽くしてやろう!!」

「ああああっ!! う、嬉しい……ありがとうございます!! んおお!! おおお、おお

っひい!! あ、愛していますう!! し、守護聖女ホワイトブレスはあ……ラネク様を愛していますうっ!!」

ラネクの言葉に快感ではなく心の底からの喜びでホワイトブレスの全身が震える。夫への愛とはまた違う。夫への愛が人間としてであれば、ラネクへの愛は雌として。心と心が通じ合わなくてもいい。ただ肉棒を与えられる幸せに、守護聖女は変態的な獣としての愛を叫んだ。

「俺は愛してはいないがなあ!! さあこのままそのボテ腹にぶち込んでやる!! その夫とは比べ物にならないザーメンをくれてやろう!!」

「き、きてえ……!! きてくださいっ!! ホワイトブレスの、孕みマンコにい……ラネク様のドロドロザーメンくださいっ!! あの人じゃできないこと、しててくださいいっ!!」わざとらしく目の前の夫と比べるようなことを言われ、それに乗っかってしまう敗北人妻ヒロイン。

何よりも射精を求め、目の前の快感だけに飛びつく様はまさに雌豚。膣内で脈動する巨大肉竿に対してギュウつと締めつける。

ぶびゅうううううううう!! びゅぶうううううううううう!!

「んほおおおおおおおっ!! ら、ラネク様のチンポ汁うう!! あ、あの人と、全

然違うのおお!! イクイクイクううう!! 孕みイキしますうう!! おおっほおおお
おおおおお!!」

既に孕んでいる子宮内へとぶちまけられる欲望の粘液。

ホワイトブレスはラネクに喜んで貰いたいが為にわざと夫と比べ、そのまま今まで見せたことのない下品なアへ顔を見せつける。

聖女ではなく便女。雌豚便女ホワイトブレスとでも呼んだ方が相応しいであろう姿。

言葉も姿も、何もかもが今日まで見てきた白守早苗と違いすぎ、夫はやはり何も言うことはできていなかった。

「はへええ……ああ……んああ……」

たつぷりと注ぎ込まれ、恍惚の表情を浮かべる守護聖女。

ラネクが肉棒を引き抜いたことによりぽっかりと開いた膣孔からどぶどぶと逆流する白濁液が零れ落ちる。

そこには、変身前に引き抜いていた結婚指輪が存在し、怪人のモノになった証のようにその淫液で穢されていった。

「さて次はお前だなホワイトハート」

ぐぶぶぶううう!!

「んおおおおっ……きゃひいひいいううううっ!! ら、ラネク様のちんぽおおっ!!」
アナルを穿^{ほじ}られていた指が引き抜かれ、代わりに念願の怪人肉棒が挿入された。
性を知らなかったはずの少女が出すとは思えない、ホワイトブレスと同じ下品な獣の
へ声が押し出される。

「んおおおおっ!! け、ケツ、マンコおおっ……!!」

そして今度はホワイトブレスの尻穴へと、ラネクの指が数本ねじ込まれ、排泄孔で快感
を受ける人妻ヒロインの浅ましい声が響いた。

排泄する為の穴だというのに、二人が共に挿入されて喘いでいる現実。どこまでも信じ
られない光景の連続に、白守夫の瞳から光が消えていく。

「んおおおおっ!! きゃひいうう!! お、おまんこにずんずんきてるうう!! お、お父さ
ん、みてええっ……わたしい、ラネク様にちんぽの気持ちよさ、教えてもらったのお……
はひいうう!! んほおお!!」

ホワイトハートは腰ではなく両腕を掴まれた状態でラネクの肉棒を、その小さな淫穴で
受け入れている。

本来ならば肉棒の形に下腹部が膨れ上がるところを、妊娠腹が隠しているが、どちらの
方がよかったのだろうか。

「さ、最初は嫌だったんだけどお……はひいい!! おおっおお!! い、今は、もう大好きいい……!! ち、ちんぽのことしか、考えられなくなっちゃうのお……おおおお!!」

肉の悦びに満ちた蕩けきった表情を見せる敗北天女。媚毒によつて最初から痛みはなく、心で否定していたモノを受け入れた結果が今の姿。

「わ、わたしっ……お父さんの、お嫁さんになりたかったけどお……んおおっ!! はひっ!! ひやううう!! ご、ごめんなさいいつ……!! し、白守心はあ……守護天女ホワイトハートはあ……ラネク様の、お嫁さんになるう……んほおおっ!!」

少女特有の父親と結婚するという夢。しかしそれも怪人からの異常すぎる快感の前に儂は散った。はかな

現実を受け入れ、極上の肉棒を持つ相手の花嫁となる、肉の悦びからくる愛が芽生えたホワイトハート。

「……か、身体が、ちんぽで犯されてえ……はひっ!! んおお、ほおお!! よ、悦んでるのおっ!! ろりまんこお、きゅんきゅんしちゃつてえ……ずっと、大好きっていつてるのお……!!」

ラネクに何をされても喜びを感じる身体になってしまった。けれどもそれに対して悲しみはなく、むしろ敗北天女は歓迎するだけ。

「嫁はとらん。だがお前もホワイトブレスと同じく、俺が飽きるまで徹底的に犯してやる」

「あ、あああ……そ、それでもいいっ……ラネク様のちんぽで、おまんこ、けつまんこもお……全部、ぐちゃぐちゃにしてええ……んおお、あはへええ!! ひゃひいうう!!」

たとえラネクが認めずとも、犯して貰えるならばそれでいいと守護天女は叫ぶ。

犯されるだけの穴。そんな存在として扱われてもいい。ラネクがいれば、肉棒で滅茶苦茶にしてくれるのならそれでいいと、堕ちた天女は満ち足りた笑顔を見せる。

「さあいけッ!! 父親の見ている前で無様にイけホワイトハートッ!!」

ぶびゅううううううう!! びゅぶりゅりゅりゅりゅうううッ!!

「んおおおおおおおッ!! は、孕みまんこにざーめんきたああああッ!! い、イクうううッ!! お父さんの前で、ろりヒロイン子宮いっぱいイクううううううん!!」

桃色のポニーテールが激しく動くほどに強く顎を跳ね上げ、もう限界のはずの腹部を更に膨らませて敗北天女はアヘ顔アクメを迎えた。

とてもではないが直視できない無様すぎる姿。一人の少女としても人間としても完全に終わってしまったのだと理解できる光景。ただその本人だけは幸せな、雌の悦びに満ちた

笑顔を浮かべている。

「おほおおおつ……み、見てくれたあ？　ら、ラネク様のちんぽ汁う……こんなに、凄
いんだよお……わ、わたしもお母さんもお……このちんぽに、めろめろにされちゃったの
お……」

ずりゆりゆつと引き抜かれる肉棒。それだけですら軽く絶頂する娘ヒロインは、ぼたぼ
たと逆流する白濁液を見せつけるように父親へと腰を突き出して、自らの指で割れ目を拡
げる。

「おほおおおつ!!　ゆ、指も凄いいいっ!!　け、ケツマンコお……悦んでますうつ!!
んおお、おおおつ!!」

隣では指で乱暴に掻き回され、強引に引き抜かれる排泄感覚に喘ぐホワイトブレスの無
様な嬌声。

指だけですら、夫では未来永劫出させることが不可能な下品な声をあげさせることが、
ラネクには可能だった。

「キシシシシッ!!　さて、じゃあ正義のヒロインが俺に敗北し、屈服した記念だ。こい
つの前で俺の子を産め。ホワイトブレス、ホワイトハート」

「は、はいっ……ラネク様の赤ちゃんを産む姿、この人に見せます……!!」

「今日でお別れだと思うから……しっかり見てね、お父さん」

ラネクに出産を命じられ、屈服母娘ヒロインは堕ちた笑顔で主人たる怪人の横に立った。そのまま見せつける為に互いに片足を上げて大きく股を開くと、ラネクの手で支えられ、しっかりと見えるように淫液塗れの膣孔を開く。

ラネクはそんな二人の乳房をまだ残る手で乱暴に掴む形で、まさに二人を堕とした怪人に相応しい姿。

「んほおおおおおっ!! ヒロインミルクでるうううっ!!」

「はひひひひひっ!! おっぱいミルク、びゅりゅびゅりゅでちやううううっ!!」
孕まされ、当然のように母娘ヒロインの乳房から溢れ出る母乳。

搾乳されるだけですら、潮を噴いて恍惚のアクメ顔を見せるホワイトブレスにホワイトハート。

だが倒れることはラネクの手で許されずに、大股開きのバランスポーズのまま、ガクガクと身体を震わせる。

「よ、よく見ててねあなたあ……私が、正義のヒロインだったホワイトブレスが……ら、ラネク様に敗北して、屈服してえ……ただの孕み穴人妻ヒロインになった姿あ……」

「わ、わたしのも見ててねえ……ほ、ホワイトハートもお……もうこの敗北ヒロインまん

こお……ううん、わたしの全部の穴……だ、大好きなラネク様のモノなのお……」

今の自分達がどれだけ淫らでラネクを喜ばせるだけの存在になったかを教えるように、蕩けきった口調でひたすらに墮落の言葉を並べ立てる堕ちた聖女に天女。

母乳を嘔き、怪人の白濁液を垂らす姿を見せつけ、倒すべきはずの敵にすべてを捧げる姿。

「んおおおおおつ!! で、でてくるううつ!! ら、ラネク様の赤ちゃん、産まれるうつ!!」

「ひやうううつ!! な、なかで暴れてええつ……きてるう!! おりてきてるのおおおつ!!」

ドクンと胎内で強く反応したかと思えば、一気に出産にまで到達するスピード。

子宮から出口へと向かって進んできているのを、前回の経験もあり身体で理解する孕み母娘ヒロイン。

「最後の記念だ。しっかりとお別れのサービスをしてやれ」

「み、見てええつ!! あ、あなたの妻だった私が、ラネク様の赤ちゃん産む姿あ……!! あ、あなた以上のチンポで孕まされて、出産する姿あつ……!! ぴ、ぴーすううつ……んほおおおおおおつ!!」

「わ、わたしの産む姿もみてえっ……!! ろ、ろりヒロインまんこからあ……ラネク様の赤ちゃん産まれるのおおっ!! ぴ、ぴーす、ぴーすうっ……んおおおおおおっ!!」
出産する直前に秘裂を拡げていた指でピースサインを作る屈服ヒロイン。それはまるで怪人出産を見せつける記念撮影のよう。

ずりゆりゆうつと顔を覗かせて一気に溢れ出す蜘蛛怪人の赤子。あの時の繭の中のように、二人の孕み穴から淫液に塗れた異形が産み落とされる。

「おほおおおおっ!! ま、まだまだでるううっ!! み、皆さんも見てくださいいい!!」
せ、正義の人妻ヒロインのお……完全敗北出産アクメええっ!! おほおおおお!!」
「はへええええっ!! み、みてみてみてええっ!! 負けちゃったホワイトハートがあ……
：ラネク様の赤ちゃんぶりゆぶり産むのみてえええっ!! んおおおおおおっ!!」
夫へ、父親へだけではない。遠くから見ているであろう、守るべきであつた人々へも見せつける。

ボトボトと産み落とされるラネクの子供達。これが先ほどホワイトハートを犯していた蜘蛛怪人へと成長するのだ。

母娘ヒロインは、多くの人々に見られながら出産する被虐の恍惚にアへ顔を晒し、すべてにお別れを示すピースサインを作ったままアクメを繰り返す。



もう白き聖女も天女も怪人のモノへと堕ちた。彼女達に与えられるのは白濁し黄ばんだ欲望だけ。

この世界がどうなろうと、彼女達には関係ない。ただ、目の前の肉の悦びだけを求める肉穴になったのだから。

二次元ドリームノベルズ

守護聖女ホワイトブレス

著者●でいふいと

装丁●マイクロハウス

発行●株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

編集部 TEL03-3551-6147 / FAX03-3551-6146

販売部 TEL03-3555-3431 / FAX03-3551-1208

©defeat 2021

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

<https://ktcom.jp/>

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、シチュエーションなど、どしどし
お書きください！ 読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

アンケートフォーム

<https://ktcom.jp/goiken/>

手紙・ハガキ・メールの宛先

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル
(株)キルタイムコミュニケーション
二次元ドリームノベルズ感想係





淫紋つきで挑む淫らな体育祭で 勝利を掴むことはできるのか!?

スポーツ大好き女子校生の輝木ミコトは、友達以上恋人未満な関係の幼なじみ元喜一郎たちと毎日運動をしながら楽しく過ごしていた。そんなある日、スポーツを地球から奪うために現れた宇宙人、プリンス・アウターの精神支配によって、人類が無気力なスポーツ嫌い状態に陥ってしまう。唯一その支配におかれなかったミコトは変身ヒロイン、ビビッド・ガールに変身するが……。敗北したミコトを待っていたのは常識改変された淫らな体育祭! パイズリ玉入れ、挿入ムカデ競走、セックス全員リレー。身体に刻まれた淫紋の力はミコトの正義と淡い恋心を砕いてゆく……。

木森山水道

挿絵:suc



電子書籍限定の二次元ドリームノベルズが登場!

表紙はもちろん、描き下ろしモノクロイラストも収録! ポリュームたっぷりでお送りします。

新たな魔王の孕み袋!?
女体化させられた元勇者は

黒井鷗

挿絵/umiHAL

TS勇者クリス
魔物ファックで
隷属産卵



小説
**魔装少女は
屈しない**
懺悔
挿絵:棒糖練乳

魔装を身に纏い、
愛しき人の為に戦う少女に
NTRの毒牙が襲い掛かる!

各作品ともに各電子書籍サイトにて好評発売中!

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は
オフィシャルサイトへ

キルタイムコミュニケーション

検索

二次元ドリームノベルズの元祖変身ヒロインが
電子書籍で帰ってきた!

サンダークワッパズ! リボーン

THUNDER CLAPSI! REBORN

羽沢向一
挿絵：緑木邑



各電子書籍サイトにて好評発売中!

本誌にて好評連載中！
**大人気同人ゲームの
単行本小説が
電子限定で登場！！**

魔剣士 ジネ2

乙女穢されし戦場

原作：まくらカバーソフト

小説：酒井仁 挿絵：桐島サトシ



全3巻各電子書籍サイトにて好評発売中！

KTC 編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は
オフィシャルサイトへ

キルタイムコミュニケーション

検索